ネトオク男の楽しい異世界貿易紀行

medici

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトオク男の楽しい異世界貿易紀行

【Ｎコード】

Ｎ３１０２Ｙ

【作者名】

ｍｅｄｉｃｉ

【あらすじ】

最終学歴高卒で親元パラサイトの青年綾馳次郎はネットオークションで生活する物欲溢れるネオニート（収入があるニート）。出品するお宝探して蔵から見つけた古い鏡は異世界と行き来できる魔法の鏡だった！！　異世界のお宝を買うために相互貿易でお金を貯めて、物欲満たして幸せ一杯の異世界ライフ！　になる予定。物欲だけじゃなく、チートとか奴隷とかもありマス。男の欲望とか多めなので苦手な方はスルーしてネ。

第1話　うぶだしミラーは異世界の香り（前書き）

初作品、初投稿です。お見苦しい点ばかりですが、よろしくお願いします。

第1話　うぶだしミラーは異世界の香り

「国境の長いトンネルを抜けると、そこは雪国であった」

有名な小説の冒頭の文が頭のなかで反芻している。

俺、綾馳次郎（アヤセジロウ）の場合はもっと劇的に

「蔵の古い鏡を抜けると、そこは真っ暗な部屋であった」

となるだろうか。

……よし。意味わからねぇ……。

その真っ暗な部屋にも鏡があって、もともといた蔵に繋がっているようだ。鏡面が妖しく蔵の中を映している。

鏡の中に飛び込んでみれば、問題なく行き来できることに安堵の息が洩れた。

蔵に来るときに持ってきていた懐中電灯で部屋を照らす。石作りのカビ臭い部屋の内部が浮かび上がるが、鏡以外にあるのは木製の箱だけだ。それ以外にはなんにもない。

だいたい8畳間くらいの部屋だろうか。窓もなんにもないので、外の様子は全くわからない。何の音も聞こえてこないから、地下室かなにかかもしれない。あとは出入り口の木製の頑丈そうな扉がひとつ。ここから外に出られるんだろう。

とりあえず、木製の箱を開けてみることにした。木製の箱という

か、昔熱中したＲＰＧの宝箱みたいな箱だ。
……おおっと！　どくばり！　は勘弁してくれよ――――、と、思いながら開けると、当然ワナなどはなく問題なく開いた。

中身は服一式だった。
中世風というかなんというか、シェイクスピア劇で使う扮装のような服だ。絹製でフリフリの付いた長袖シャツ、金糸の刺繍が施されたいかにもな時代めいたベスト、太めのズボンとベルト、他にはなにも入っていなかった。

服はいったん箱に戻し、これからどうするか考える。扉から外に出てもいいが……。

――少し悩んだが、ひとまず鏡の世界から脱出して、蔵に戻ることにした。
蔵に戻り、さきほどの部屋と同じようにカビ臭を感じながら、気持ちを落ち着かせて考えてみる。ありえないことが起きているというのはわかる。古い蔵で見つけた鏡が別世界へ通じてました！　なんて、ファンタジーではお約束な設定だけれども、実際に起こると存外に困るもんだな。さて、どうすっかなぁ。

……まあ、ひとつ言えることは、この鏡はすごい高値で売れる！
ということやで……。

◇◆◆◆◇

俺は高校を卒業してからの就職で失敗して、それからは2年近くニートを続けている。就職で失敗したと言っても、就職ができなかったわけではなく、最悪最低のブラック企業に入ってしまい、精神的にも肉体的にも疲れ果ててしまい退職した、というだけの話だ。

退職してからは、どうしても仕事をする気になれずブラブラゴロゴロしてたんだが、いつまでもなにもせずにいられるわけもないわけで、偶然本屋で見かけた「儲かる副業！ネットオークションで月収３０万円！」という本を買い、その本の通りに、古本やら古道具やらをネットオークションで売りさばいてみたら、ことのほか儲かってしまって……、それからは、まあ、それで生活している。

幸い、近所で毎週フリーマーケットが開催されているし、地元の大きい神社での骨董市なんかでもそれなりに良い物が買えるため、オークションで思った以上の収益を上げることができていた。

途中からは自分も面白くなってしまって、半分くらい趣味と実益を兼ねていると言っても過言ではないけどな。

最初のころはなにが高いのかよくわからなくて、赤字とまではいかなかったが「儲かる」というほどではなかった。しかし今ではずいぶん慣れてきて、微妙に貯金すらできているほどだ。もともと物好き（アイテム好き）ではあったが、これはなかなか才能があるなと、自分でうぬぼれちゃうね。

鏡を見つけたのは、以前からアプローチをかけていた近所の旧家の蔵の中だった。桐の箪笥の裏に隠されてるようにして置かれていて、枠はマホガニーかウォルナット。重厚な意匠の施され、年式も古そうだったし「これは存外良さそうなものを見つけたぞ、問題はなんて言いくるめて買い叩くかだなー」　などと皮算用していたの

だが……。

考え事をしながら暗い蔵の中をウロウロしていたからか、足元に雑に積まれていた古道具類に足を取られて、鏡のほうに倒れこんでしまい、そのまま鏡の中に吸い込まれた。そして、冒頭にもどる。

……というわけだ。ザッというと、まあ……そんなかんじ。

蔵の中にはまだ金になりそうなものがあったが（古い皿や火鉢なかの道具類とか、その道具をしまう行李も売れるし、昔のオモチャなんかも売れる。だいたい古いってだけである程度高く売れちゃうので、蔵はまさに宝の山なのよ）、今はまずは鏡だ。蔵から出て、家主さんに、蔵の中にあった鏡だけ買い取りたいと交渉を始めることにした。

「あ、すんませーん。蔵のなか見させてもらった者ですけどぉー」

居間で茶を飲んでいる家主（８０歳くらいのおばあちゃん。経験から言って老婆はチョロイ）に声をかける。

「蔵の中にあったもので、とりあえず大きい姿見だけ今回譲って欲しいんですよ。ちょっとサイズ大きいもんで、他のもの運べないもんでね、鏡だけ。で、金額なんですけど、４０００円で買い取らしていただきたいんですよ。よろしいですか？」

一気に喋る。もう４０００円は出しておく。取引は有無を言わさずスピーディに行うのが肝心だ。「心変わりしだす前に撤収しなければ……」　と思っていると。

「あー、あんなかにあるもんはもう全部いらんもんじゃけ、なん

でも持ってってええよ。金もいらん」

と老婆。やったー！　超ラッキー！　だが、実はこれはよくあるパターン。蔵を開かせるところまでいけば、もうほとんど中身はもらえたも同然だったりするのだ。

蔵の持ち主ってのは大抵は蔵のことを「古いガラクタが詰まってる片付けの面倒な倉庫」程度にしか認識していない。自前の倉庫を知らないやつに漁らせるのは嫌だけど、かといって中身を大事にしているわけでもない、というわけだ。俺みたいな貧乏人からすると宝の山なんだけどねー。金持ちってのはそういう性分だから金持ちなのかもしれないな。

――そんなわけで、無事鏡をゲットして、割らないよう車に積み込んで家まで運んだ。

俺は、一人暮らしをしていない。

両親と同居してる。もっと言うとパラサイトと言ってもいいかもしれない。

就職してないから……、と言い訳して、ちょっとばかりの食費を払っているだけである。兄弟は兄貴と姉貴がいて、どっちももう家を出てる。

俺は末っ子で甘やかされて育ったから、パラサイトでも仕方がないんだ！でも就職したら家から出ます！　就職したら必ず出ますぞ！

第2話　異世界屋敷はヨーロッパの香り（前書き）

第2話　異世界屋敷はヨーロッパの香り

行くべきか行かぬべきか、それが問題だ。

鏡を前にして俺は唸っていた。この鏡が別のどこかへ通じているとしても、別に無理して行かなくてもいいのだ。必ず帰ってこられる保証もないし、うっかりどっちかの鏡が割れたらおそらくはそれでジ・エンド。どちらにも行き来できなくなろうだろうしな。

向こうに行けないのはともかく、帰ってこれなくなるとかマジ勘弁。

……かといって、なにもせずにこの鏡を売ると言ってもな……。

最低でもどこへ繋がっているのか程度は調べないと、売りようがない。「超レア！どこかへ繋がっている魔法の鏡！特価1億円」では誰も買わないだろう。というか本気にされない。どうみてもネタ出品だものね。

なのでとにかく、鏡の世界を探索することにした。

鏡が繋がっているのは謎の石の部屋。その木製の扉を開いた先がどうなっているか全くの未知数なので、考えられる範囲で準備しなければならないが、とりあえずはすぐ戻れる範囲だけ調べてみようと思う。

玄関から編み上げブーツを持ってきて履き、懐中電灯で照らしな

がら鏡の世界へ入る。ヌルッとした触感もなく、世界を移動する。本当に奇妙だが、今はとにかく探検だ。この鏡自体のことはおそらくどれほど調べてもわかるまい。

木の扉に閂が掛かっていたので外し、少しだけ扉を開いて向こう側を伺う。

石の部屋は地下室だったのだろうか、扉の向こうは同じような石作りの昇り階段で、階段が途切れた先から淡く光が洩れている。正直すでに心臓バクバクなんだが、とにかく進むしかない。正直、かなりビビッてます。

おっかなびっくり階段を上った先は、西洋風の屋敷の廃屋の一室だった。窓から指す日の光が、淡く部屋内を照らしている。

広さとしては3ＬＤＫといったところだろうか。現代的な西洋屋敷という風情よりは、もう少し雑な石作りの屋敷で、残されたオーク材の重厚なテーブルや、マホガニー製の食器棚が、かつての住人の生活を偲んでいる。

イギリスかフランスあたりへと繋がっていたのだろうか……？と考えながらも、残されている道具を物色する。食器棚やテーブルなどの家具は残されているが、小物類はこれといってなにも見つからなかった。前住人は大物だけ残して引っ越したのだろうか、上手くすればオクで売れるものが見つかると思ったんだが……。

まあ、食器棚やテーブルもかなり良い物なので、売れば相当良い金になるだろう。勝手に持って帰って売っていいのかどうかは知らんが。

どうやら外国と繋がっていることが判明したので、外に出てみる

ことにする。恥ずかしながら、少しだけファンタジー的な異世界と繋がっているんじゃないかという懸念があったのだ。
鏡の世界ってだけで十分にファンタジーだしな。

家の外も完全に荒れ果て、雑草というレベルでは片付けられないレベルの有様である。つか、木だよこれ。林の中に家があるって感じに近い。日本家屋だったらとっくに倒壊してるだろう。

そうでなくても家はもともと林の中にポッカリと開いた場所にあったみたいで、回りは全部、背の高い広葉樹の林。それでもなんとか、もともと道だったらしきところを発見し、しばらく歩いて行くと草原に出た。人影は全くない。田舎っていうか、手付かずの土地って感じ。

されどもめげずにしばらく歩いていると、小さい村を発見した。

鏡のある屋敷と比べると質素な石作りの家が十数件ある。俺は林の中から身を隠して発見した第一村人の農夫を観察してみることにした。

農夫は西洋系のおっさんといったところ。やはり外国……、つまり地球のどこかではあるらしいが、ここで俺が出て行っても身分証明もなけりゃ、言葉も通じないわけで実際どうしようもない。
なので、さて、どうするか……。

そのまま隠れて観察を続けていると、畑の反対側から農夫の嫁といった風情の女が来て叫んだ。

「あんたー、お昼持って来ただよー！」

それに気付いて作業を中断し、返事をしながら女のほうへ向かう男。

……うむ。完全に日本語だったな。

厳密には、日本語として「理解した」という感じだ。耳に入ってきたときはまったく別の聞きおぼえのない言語だったはずだ。だがなんていうか、脳内で一瞬で日本語として変換された。

これなんて翻訳こんにゃく？

◇◆◆◆◇

ひとまず、いったん屋敷へ帰ることにした。

今回の自動翻訳でまた一気にファンタジー度が増した。うっかり「やぁ、日本から観光に来た者です、ＨＡＨＡＨＡ！」　なんて声を掛けたらいきなりオマワリさんを呼ばれて拘束！　となる可能性も排除できないからな。現代の地球の西洋の国なら、そんなことはないだろうけども、最悪の可能性も考えておかないといかん。

屋敷に帰った俺は、なにかこの世界に関する情報がないか今一度

家捜ししてみることにした。まだ見てない部屋もあるとはいえ、リビング？　にテーブルと花台くらいしかないところを見るとあまり期待はできそうもないが……。

最初に書籍を探したが、やはり一冊も見つけられなかった。文字を見れば一目瞭然だっただがな。

他の部屋にも家具がいくつか残されていた、タンスやベッド、チェアにデスク、チェストにブックビューロー。どれも良い品だ。まとめて売れば１００万円は下らないだろう。もう、これらを売っちゃって、それでこの鏡のことはおしまいにしてしまってもいいのかも……、と思ってしまう程度には美味（うまい）いです。

しかし、肝心の決定打になる情報が見つからない。
この家にあるのは、地下室の箱の中にあった例のシェイクスピア服と、英国アンティークみたいな趣の家具類だけである。まあ、これらだけとっても現代世界とは思えないわけだが、アンティーク趣味の人が住んでた家と言われてしまえばそこまでであるからして。

あとは裏口と屋根裏ぐらいしか見るところが残っていない。正直、屋根裏はただでさえホコリっぽいのに勘弁してほしいので、裏口を開けてなにかないか探してみる。

と、そこに蜘蛛がいた。

厳密には裏口の壁のところに蜘蛛が巣を張ってたのだが、この蜘蛛、胴体だけで１０センチほどもある。そして脚が１２本あり、脚も入れた全長は２５ｃｍくらいだろうか。巣の真ん中で大人しく佇んでいるだけだが、……これはでかい。
蜘蛛が苦手な人が見たら気絶してもおかしくないレベルだわ。

携帯のカメラでおっかなびっくり写真に収めて、鏡の部屋から自分の部屋へ戻る。

携帯の蜘蛛の画像を元に巨大な蜘蛛についてネット検索（ググる）する。ちょうど同じサイズのものでルブロンオオツチクモというのが出るが、これではない。そもそもツチグモじゃないしな。ジョロウグモの類のようだし。そもそも脚が１２本ある時点で蜘蛛ですらないし。

落ち着くために台所でコーヒーを入れて持ってきて、一息入れた。インターネットでの情報が絶対だと言うつもりはないが、これでひとつの可能性が消えたと見て間違いないだろう。

とりあえず「現代の地球のどこか」ではない。過去の地球か、異世界かの二択になったわけだ。

今、ググッても見つけられないクモは、単純に絶滅しただけかもしれないからな。とはいえ、自動翻訳の件もあるし、異世界の可能性のほうが高いと言わざるを得ないだろうな。これからは、異世界にいるものとして行動したほうが良さそうだ。

つまり、モンスターが出るかもしれない。とか、魔法で撃たれるかもしれない。とか、異端審問に掛けられて火あぶりなるかもしれない。とかだ。

気楽な気持ちでうろついていたらヤバイと思っとかないと……。

第2話　異世界屋敷はヨーロッパの香り（後書き）

オーク材とかマホガニー材とかは、主人公がそう思っているだけで、厳密にはきっと違う木です。よく似てるだけで。

第3話　異世界衣装はコスプレの香り

親ゆずりの臆病者で子供のころから損ばかりしている。

そんなわけで、もう少しだけ向こうの世界の情報を得たら鏡は売却することにした。単純に異世界とか怖いし、過去の世界だとしたら、それはそれで怖い。ハッキリ言って俺の手に余る。

厳密には売却する前に「異世界へ渡航できる権利」を１００万円くらいでネットで若者を募って売ろうかと考えている。行けなかったらお金は頂かないという風にすればいいしな。

３００人も向こうに送れば3億円ですよ。ウッハウハ。

その後で、ノウハウを売るという触れ込みで鏡ごと売却してしまえば、異世界とも後腐れなくサヨナラできるし、お金もたくさんゲットできて一石二鳥だわ。7億円とかで売れば、合計で１０億円！

遊んで暮らせる！！

……とはいえ、現段階では完全に絵に描いたモチ。もっと情報を得て、それなりに上手くやらなきゃなー。

で、まあ、結局はもう少し鏡の世界の情報が必要なのだ。なのでいったん鏡の世界へ入り、例のシェイクスピア服を持ってくることにした。あ、向こうのものってこっちに持ち込めるのかな、そういえば。

……普通にこっちの世界に持ち込めました。

ひょっとすると持ち込めない可能性も考えてたけど、まあこれで、屋敷の家具はこっちでオクに掛けれられる。ちょっとした軍資金にはなりそうだ。

屋敷の服は何年も宝箱の肥やしだったとは思えないほど、しっかりしており、サイズも多少小さい程度で問題なく着れた。

しかし……、これは恥ずかしい。ヒラヒラとした飾りの付いたシルクのシャツってだけで、なんとも言えない気分だが、さらに刺繍入りのベスト。これもちょっと光沢のある生地だし、パンツもかすかに光沢がある。なんで全体的に光沢多めなんだろう。

だいぶコスプレっぽくて恥ずかしいが、あの世界に溶け込むには必要な処置だと自分を納得させる（農夫もこんな格好だったような気がするしな）。まあ、自前の服だと、ジャージとかトレーナーとか、そんなもんしかないし、それよりは自然だろうと思うことにした。

バッグに必要な道具、というか、もしもの時の自衛の為の武器（自作のナイフを数本）を入れ、編み上げブーツを履いて鏡の中へ入る。

屋敷の外にでて、ふと気付く。そういえば時間のことなんにも考えてなかった。

日本時間は１０時をちょっと回ったところだが、こっちも同じ時間とは限らないのだった。全く知らないところで日が暮れるたりしたら、それこそ死の危険がある。

日の高さを確かめようとして、眼に入ったものに愕然とする。
ああー……「この世界の情報」　こんなところにありましたよ。なんで気が付かなかったんだろ。

昼間なのに月が二つでてました。

◇◆◆◆◇

太陽はちょうど頭上の位置。昼の長さがどうなのかはわからないが、とりあえずすぐに日が暮れる心配はなさそうだ。ここが異世界なのはもう確実と言っていい。
地球に月が二つあった歴史はないはずだからな。

屋敷の前の林を抜け草原に出る。前に来たときと違い、全くの異世界だと思うと、林の木々もなんだか見たことがない種類のものが多く混じっているように見えてくる（実際全部異世界種？なわけだけど）。

――そういえばガラパゴス島では、観光客が他の地域の種を持ち込まないように、靴底を洗ってから上陸させたり、遊歩道以外は歩かせないなどの管理を徹底しているらしい。

全然気にしてなかったけど、異世界を行き来するなら、そのへんもある程度は気を配らないと思わぬ事態にならないとも限らないな。こっちの虫を一匹持ち込んだばっかりに、向こうの虫が何種類も絶滅したりとか絶対にないとは言い切れないし。

そんなことをツラツラ考えながら歩いていると。

ガサッ　ガサッ

５０ｍくらい向こうの茂みから音がして、すわモンスターかと身構えたところ。

不精ヒゲのワイルド系猟師が出てきた。

殺したばかりと思しきイノシシ的な生き物を引きずって。

第3話　異世界衣装はコスプレの香り（後書き）

超短くてすみません。

第４話　異世界はＲＰＧの香り

「どっどど　どどうど　どどうど　どどう」

まずい、まったく心の準備ができていなかった。「どうもこんにちは」　と言おうとしたのに死ぬほど　吃(どもった)った。

「どうした？　こんなところでなにしてる？」

「どどどどうもこんにちは」

やっと普通にこんにちはできた。

猟師は見た目３０歳後半といった感じの、ブラウンの髪と無精ヒゲがワイルドなナイスミドル。

弓を肩に掛け、腰には大振りなマチェット。マタギよろしく毛皮の服を着て、こちらを見つめる両目は目力(めぢから)強すぎてちょっと怖い。

質問に挨拶で返してしまったが、仕方がない、なんとかファーストコンタクトを成功させねば……！　と、とにかく言葉を紡いだ。

「え～、あっと、それがですね、なんというか、自分もどうして自分がここにいるのかわからなくてですね。なんというか……、気付いたらあっちの森の中にいたっていうか……、自分の過去が思い出せないっていうか……、ハッキリ言うと記憶喪失っていうか！」

記憶喪失設定でいくことにしてみた。

まあ、これは最初から決めてたことだが、他に思いつかなかったからな。しかし、猟師のポカンとした表情を見ると、どうも失敗したかな？　という気もしてくるけど仕方がない。押し通すしかないぜ。

「記憶喪失か……。見たとこかなり若いみたいだが……。おい、名前くらいは覚えているのか？」

「……名前と歳は覚えています。ジロー・アヤセ。２１歳です」

そう答えると、アゴに手をやってなにやら思案していたようだが、彼の中でなにかを把握したらしく、ウムと頷いて言った。

「そうか。なぜ記憶を失ったのかはわからんが、……おそらく内陸からの脱出組だろう。ベストの刺繍もドレスシャツもこの辺りには無い物だ。……憲兵から逃げてきたにしては、身奇麗過ぎるが……」

「……えっと、憲兵に追われる要素があるんですか？」

聞き捨てならない単語を聞いて焦る。え？　ガチで憲兵とか存在してたんですか……？　のん気に村で「こにゃにゃちわ」してたら、ガチでタイーホの可能性もあったってこと？

「ああ、内陸からの脱出者は憲兵に捕らえられ本国送還になるか、依願して労働奴隷になるかのどちらかになる。まあ、だいたいの脱出者はこっちに協力者を持っていて上手く溶け込んでいるようだがな。……お前みたいに脱出者丸出しの格好してるやつは稀だよ。ちなみに、脱出者を憲兵に引き渡すと報奨金として銀貨３枚が貰える」

そう言ってニヤリと笑う猟師。ち　な　み　にじゃないよ、ち
な　み　にじゃ。

良かれと思って着た異世界服で、マジで奴隷になる5秒前とか洒落になんねー！！　こんなことなら大人しく自前の服着てればよかったんや……。このガチムチ猟師が俺を憲兵に引き渡したら、異世界で楽しい奴隷生活がはじまってしまうんや……。

俺はよほど絶望的な顔をしていたらしい。猟師はそんな俺をみて嬉しそうにワッハッハと豪快に笑い、手を振りながら言った。

「悪い悪い。冗談だ。いや、銀貨3枚の話は本当だが、別にお前を憲兵に渡したりはせんよ。ここでの出会いもル・バラカのお導きだろう」

「……ありがとうございます。……いやぁ、心臓に悪いですよ……」

「さて、俺はコイツをさっさと解体せにゃならんから家へ帰る。どうする？　来るなら運ぶのを手伝え」

と言って、イノシシを引きずって村とは反対方向へ歩き出す猟師。どうするもこうするも、今のところは猟師を頼る他になさそうなので、イノシシを運ぶのを手伝うしかなかった。

◇◆◆◆◇

猟師の家は、村からは大体１ｋｍほど離れてた小高い丘の上にあった。村にあった石の家とだいたい同じような家で、周りには小さい畑があり質素ながらも、なんていうか、幸せの気配がする、そんな家だ。

俺はイノシシを一緒に運びながら、「このガチムチ猟師がアッチの趣味の方だったら、どう考えてもオッスオッス」　などと考えていたが、素朴な生活の気配のする家が見え、そこに猟師の奥さんと思しき女性がいるのを見て、ひとまず安心した。ノンケだコレ。

奥さんと思しき女性はやはり奥さんだった。猟師よりだいぶ年下と思われる肉感的な赤毛美人で、猟師ほどではないけど、背が高く、なんとも肉弾戦な夫婦である。

猟師がイノシシを解体している間、奥さんがこの世界のことをいろいろと教えてくれた。

まず、「内陸からの脱出組」とやらが、見つかるとアレな理由なんだけど。

今いるここは、ハノーク帝国領の第2自由都市エリシェの街の近郊にあたる場所らしい。自由都市は帝国の都市でも特別なもので、エリシェのほかに2箇所だけ定められ、その都市でだけ他国との貿易が許されているんだそうだ。それ故、他の帝国都市と比べて活気

があり、また物資も豊富なため、制限を掛けないといくらでも他の帝国都市から人が押し寄せてきてしまう。それで、例の本国帰還か奴隷化かって話になるわけで、実際マジで俺もヤバいところだったわけだ。猟師さまさまだ。

猟師は名前をシェロー・ロートといい、この辺りで猟をしながら、モンスターが森から出てくるのを監視したり退治したりする仕事をしているそうだ。

猟師になる前は傭兵として、それなりにブイブイ言わせてたそうで、奥さんことレベッカさんも同じ傭兵団出身となればまさに異世界クオリティ。奥さん身長１８０ｃｍくらいあるんだよ……。猟師にいたっては１９０近いし……。

モンスターは基本的にはこの辺りにはいないんだそうだ。ただそれでも自然発生的に”湧いてしまう”ことがあるらしく、その場合、人のいる場所へ真っ直ぐ向かってくるため、村と森との直線状にあるこの場所で監視するのが最も適している。……という説明だったんだけど、なんともわかりづらい。湧いてしまうって？

「モンスターってのは、血肉を持った生物じゃあないからねー。森みたいに魔素が溜まりやすい場所では、ときどき湧くんだよ。それで、一直線に強い魔力を持つ人間を襲いにやってくる。それを私たちがやっつけてるってわけさ。ま、このへんでは大した奴は湧かないし、心配はいらないよ」

「あ、いえ、心配、というわけではないんですけどね。しかし、それではモンスターは通常はどんな場所に『湧く』んですか？」

「普通はダンジョンに湧くわね。あとは竜が住んでいるような場所も魔素が濃くてモンスターが湧きやすいかな。ま、ダンジョンは出

入り口に結界を施してるから、中からモンスターが出てくることはないし、竜がいるような場所も人里から離れた場所だからね。一般人がモンスターを目にする機会は少なくなるわ」

ダンジョンｋｔｋｒ。

なんとも正統派なＲＰＧワールドである。モンスターの定義は予想の斜め上だったけど、それほど出ないみたいだし、そこらで襲われることはなさそうだ。

――と、思っていたら、魔獣やら亜人族やらの『野生動物』が、人里から離れたところにはいるので十分危険だそうで……。特に亜人族は人間を痛めつけて連れ帰ってアレしちゃうようなナニなんで、いやー貞操の危機の多い異世界で参っちゃいますね！

◇◆◆◆◇

イノシシ解体中のシェローさんが戻ってきて、手伝いのためにレベッカさんを連れて行った（皮を剥ぐ為に一旦イノシシを吊る必要があるそうだ）為、部屋を検分して生活様式をこっそりチェックす

ることにした。文明は進んでないみたいだけど、どういう道具使ってるのか凄く興味あるしな。

基本的には、木製の道具が多いが、壁に飾られている飾り皿は磁器のようだし、カトラリーも銀製のようだ。まあ、普段使いの皿は磁器ではなく陶器と木の器のようだし、磁器は高級品ということだろう。そのわりにカトラリーはすべて銀（だと思う）だ。ステンレス鋼がないんだろうな、おそらく。

キッチンはかまど式で当然ガスなんかはなし。燃料は木炭で、今は火を落としている。

壁にシェローさんの武器と思しき使い込まれた大剣（クレイモア）が立てかけられていた。

さすがに勝手に触るのはルール違反のような気がしたので触らなかったが、その横の壁に、装飾の施された短剣（ダガー）が飾られているのを見つけて、目が釘付けになってしまった。

鞘に入っているので刀身は見えないが、絶妙な捻れ杢（もく）の入った黒檀（エボニー）の鞘に幾何学文様の螺鈿（らでん）細工が入り、鞘の石突と口金、鍔（つば）、柄頭（つかがしら）は青白く輝く金属製で美しい彫金が施されている。柄はらせん状に削られた鞘と同材料の黒檀で、こちらも杢（もく）の入りが美しい。

一見しただけでわかる、素晴らしい品だ。黒を主体とした落ち着いた一品であるのに、魔力とでも言うようなオーラが立ち昇り、その存在を主張している。

これはどうあっても刀身も見たい。

シェローさんとレベッカさんはまだイノシシと格闘中のようだったので、ちょっとだけちょっとだけよ……と呟きながらコッソリ短

剣を手に取って、鞘を引き抜いた。
鈍く輝く刀身はダマスカス製らしい多層鋼の文様入りの両刃で、鎬の部分にはルーン文字のようなもの（とにかく読めない文字のような記号）が打ち込んである。

……うん。文句なしにカッコいい。
――――ヤバイ、ハッキリ言ってめっちゃ欲しい。
こんなに物欲が刺激されるアイテムは久しぶりだわぁ。これくらいのブツだとオクに出さずに殿堂入りにするんだけどなー。
つか、こんなのが普通にあるってことは、上手くやればこういうのこっちで手に入れられるってことなんじゃね？　これは短剣だけど長剣（ロングソード）でもこれくらい素晴らしいやつもあるんじゃね？
ヤバイ、異世界深入りするつもりなかったけど、こんなお宝が手に入るならもうちょっと無理してもいいかもしれないとか思いはじめちゃった！　思いはじめちゃった！
ハッキリ言って日本だったら重要文化財クラスなんじゃね？　うおー！　どうしよどうしよ！
うおォン！

「……それが気に入ったの？」
「っっ！」
突然声を掛けられて飛び上がる。つい熱中しすぎてしまい、レベッカさんが戻ってきたのにぜんぜん気がつかなかった。

「……えっと、はい、すみません、勝手に触ってしまって……。こんなにカッコいい剣は見たことがなかったので」

「ふふふ、記憶喪失なのに、そういのはわかるの？」

「……（あちゃー）」

やっべ、失敗した！　と思っていると、あまり気にした様子もなくレベッカさんが続ける。

「それね、傭兵やってたころに団長が皇帝から賜った品でね。団長が亡くなったときに形見として貰ってきたものなのよ。実際に使うようなものじゃないから飾ってるんだけどね。なかなかステキでしょう？」

「はい、……記憶が戻ったとかではないんですが、この剣にはなんだか引き寄せられてしまって……。こういうものを扱うような仕事でもしていたのかもしれません」

「仕事？　――そういえばジローくん天職は？」

「……テンショク？　ですか？」

「祝福は受けているんでしょう？　その天職よ」

……かれこれ2年くらいニートなんですけお……。
それに祝福ってなんだろか。そもそもなんで職業聞いてくるの？
誤魔化しきれないニート臭が……？

「……すみません、ちょっと天職？　のことは記憶を喪失しているようで……。あと祝福ってのもよくわからなくて……」

「天職は、祝福を受けているなら、念じれば見られるわよー。こう『天職、天職、天職……』とね」

なんというフワッとした説明……。さっぱり意味がわからねぇ。そもそも、祝福なんてものは受けてないんだから、見られるわけがないんだし、念じたフリして「無理でした。祝福とやらは受けていない模様です」　と誤魔化した。

「うーん？　ジローくんは商人見習いだったりしたのかしらねー。狙った天職を得るための修行するのはたまーにあることだし……。ま、とにかく明日、祝福を受けに行ってみましょうか、試しに。これからエリシェで暮らすなら結局なんらかの天職が必要になるしねー」

「祝福ってのがイマイチよくわからないんですけど、どういうものなんですか？」

「”祝福を受けて天職を得る”。大精霊ル・バラカが祝福を授けてくださるのよ。そして、天職に目覚めるというわけ」

祝福を受けて天職を得る……か。わかるようなわからないような話だ。しかし明日ってことは、今日どうすんの俺。家になんにも言ってきてないんですけお……。

「とにかく今日は泊まってきなさいな」

「は、はい！　ありがとうございます。お世話になりまっす！」

某ＲＰＧの「てめえみてえなガキは一晩泊まっていきやがれ」を思い出しながらやけくそで返事をする俺だった。

第5話　異世界都市は地中海の香り

どこか深いところからゆっくりと浮かび上がるように、俺は意識を取り戻しかけていた。

……まあ、普通に朝になって目が覚めたってだけだけれどもな。慣れない人んちのベッドだけれど、思いのほか良く眠れてしまった。なんだかんだいって疲れてたんだなぁ。昨日はあのあと、夕飯をご馳走になってから、すぐ寝たんだけど。

しかし昨日の夕飯はなかなかにワイルドだったなぁ……。

シェローさんが「今日はご馳走だぞ、ラッキーだったな」　と持って来たのはイノシシの肝臓（レバー）で、主食は芋、副菜は豆、さらにシェローさんが手ずから焼いたイノシシステーキ。

当然レバーは生のまま、味付けは岩塩だけで頂きました。まあ、ワイルドだけど思いの他美味しかったよ。新鮮で。

しかし、イノシシステーキはちょっと野趣強すぎて都会育ちのおいらにゃ辛いものがあっただよ……。味は濃いけど、臭いもわりと濃い……。食べられないほどではないんだが、せめて香辛料かなんかで誤魔化せれば……、と思ったけど、香辛料は高級品なんだとかで。

じゃあ香草とかでもよかったんだけど、人んちでご馳走になっといて文句も言えないしなー。けっこう要領いい末っ子の俺としては「とっても美味しいです！」　とか言って食べましたよ。かなり胃がもたれたがな！

とは言え、初の異世界での食事。味覚に大きな差ががあったらどうしようかと、少し心配もあったが、多少ワイルドさがあるとはいえ、基本的なところに差はなさそうで安心したものだ。
今度は味噌でも差し入れしてやろう。異世界人の口に合うかはわからんが。

――――さて、考えてたのとちょっと違う展開に巻き込まれるようにして、一晩異世界で過ごしてしまったわけだけれども、これからどうしようか……。昨日、寝る前に多少は考えたが――――

まず、一つ目として。
当初の予定としては、こっちの情報をある程度得たら「異世界へ渡航できる権利」　を売ろうと思ってたけれど、この国の情勢だと、正直かなり無理くさいことが判明してしまったこと。
なんせ、内陸から来たと思われたら憲兵にタイーホだ。さすがにそんな異世界ライフを売りつけるわけにもいかんだろう。

二つ目として。
例の短剣（ダガー）のこと。
あれだけの品は、普通に俺が日本でネットオークション遊びをしていても絶対に手に入れることはできないと断言できる。まあ、こちらの世界でも簡単に手に入るようなものでもないだろうが（皇帝

から賜ったと言っていたしな）、だが傭兵へ褒美として渡すくらいだ、完全に入手できないほどの品でもないだろう。
滅多に見られないようなお宝だとはいえ、ちょっと驚くくらい夢中になっていて、我ながら引くわぁ……（昨日もあのあと小一時間くらい見させてもらってしまった）。

三つ目として。
日本に異世界の品を持ち込んでネットオークションに掛けても儲かりそうだが、日本からこっちに物を持ち込んだら、もっとずっと儲かりそうだっていうこと。昨日の夕飯での香辛料の例を出すまでもなく、売れそうなものは数限りなくあるし。
それと昨日それとなくシェローさんに聞いたんだけど、こっちの通貨って、銅貨、銀貨、そして金貨なんだよね。金貨ですよ金貨。日本に持ち帰ればそのまま換金できる！　グラム４０００円ぐらいだっけ、今。
正直、フリーマーケットでお宝探すのが馬鹿らしいほどの効率を叩き出すのが明白だもんだから、かなり商売っ気が出てきてしまっているんだよね。

四つ目として。
まあ、これは三つ目からの派生なんだが、効率よく儲かるってことは、お金持ちになってアレとかコレとか買えたり、店とか始められたり、もっと言うと、会社とか立ち上げちゃって社長になれちゃったりとか！　とかとか！　ってことなんだよね。
でも厳密になんの仕事したいとかは全然ないんだ……。働いたら負けかなと思っている。
ああ、それか思い切って趣味全開の店のオーナーとかなら、いいかもなぁ……。儲け度外視で商売できるくらい異世界との交易で儲

かったらやれるかもしれないな。デュフッ。

五つ目として。
やっぱ異世界で彼女作ったりとか、胸が熱くなるよな……。
なんてったって異世界、こっちの価値観ではニートの俺でもモテたりとかもありえるかもしれないしな！　かと言って、向こうからアプローチ掛けてくるような慎みのない女はごめんだよ！　彼女いない暦＝年齢の童帝なめんな！
……ちょっと脱線したかな。でもわりと切実な問題なんだよコレ。

六つ目として。
気になるよね、祝福。
単純に自分がなんの天職があるのか、すっげー気になる。だって現実にはネオニートなんだもん！！
受けさせて貰おうか！　異世界の祝福とやらを！

「受けさせて貰おうか！　異世界の祝福とやらを！」
「ん？　ジローなんか言ったか？」

うわぁああ、口に出してた。

◇◆◆◆◇

これから「記憶喪失」の俺としては、どうしたらいいだろうかとシェローさんに相談してみた。
やりたいことはいろいろ思いついたけれど、記憶喪失のはずの俺がいきなり精力的に活動しはじめちゃうのも不自然だしな。

その際、「どうやら自分は商人みたいなことをしていたらしい。していたんじゃないかな？　多分？」
などと遠まわし且つ曖昧に言ってみたら、まず神殿で祝福を受け、そこでの天職次第で、対応したギルドに上手く紹介してくれるとのこと。

なんだからずいぶん良い人すぎて恐縮しちゃうんだけど、シェローさん曰く、困っている人に出会うということ自体が、ル・バラカのお導きであって、祝福を受けているものは、その導きに遵っているだけだとかなんとか。

要するにそういう宗教観だということなんだろうけれど、シェローさんが特別いい人なだけなんじゃないかという気もしないでもない。
パッと見、山賊みたいなオッサンなんだけどなー、人は見かけじゃ判断できないものだね！

そんなわけで、エリシェの街に向かってシェローさんとレベッカさんと俺の3人と、昨日のイノシシの肉と皮を積んだ荷馬1頭で歩いてる。村の手前で街道に出て、シェローさんの家からおよそ2時間くらいでエリシェの街に到着した。

エリシェは、2メートル程度のその気になれば簡単に登れる程度の城郭に囲まれた都市で、石作りの家以外にも煉瓦作りの家も散見でき、赤い屋根の連なりが美しい。

入り口には門番はあれど、普通に開けっぴろげで入り放題出放題。

想像してたのよりずいぶんユルかった。

◇◆◆◆◇

確かに活気のあふれる街だ。

異世界の街というより、イタリアかどこかの外国へ来てしまったかのような感覚に襲われる。が、街行く人をよく見ると、ローブを着た魔法使い風の男やら、猫耳に尻尾の獣人少女やら（ちょっと毛深かめ）、槍を担いだプレートメイルやら、背の低いガチムチヒゲもじゃ親父（ドワーフ？）の集団やら、とにかく種々雑多で、ああ、やはり異世界なんだなといちいち再認識させられた。　数でいえば、人間が一番多いようだったけど、亜人というか異世界種族というか、人間以外の種族の方もけっこういるんだよ。

神殿に行く前に肉と毛皮を卸しに行くというので、まずはそれに同行する。シェローさんが肉と毛皮を担いで、買取所らしき建物に入っていくのを見守りなら僕といっしょに残ったレベッカさんに気になったことを質問してみた。

「あの肉と毛皮でどれくらいのお金になるんですか？」

「んー、せいぜい銀貨3枚になればいいところね。それでもうちの食費の半月分くらいにはなるから悪くない額ではあるのよ。最近は猟師が減ったから、少しだけ買取価格が上がったってのもあるしね」

……銀貨3枚で半月の食費というと、銀貨1枚＝1万円くらいの価値なんだろうか？　いや、それは日本の貨幣価値に照らし合わせすぎているか……。

「金貨は銀貨１０枚分なんでしたっけ？　銅貨は１０枚では銀貨１枚分？」

「金貨はそのとおりだけど、銅貨はちょっと違うわね。１０枚で銀貨1枚になるのは白銅貨よ。そして、青銅貨、これね、これが１０枚で白銅貨1枚分」

と言って、白銅貨と青銅貨を見せてくれるレベッカさん。白銅貨は厳つくした５００円玉の使い古したもののようなコインで、青銅貨は、１セント硬貨に似た小さいコインだった。

うーん、とりあえず１０進法で安心した。けど、まだいまいちわからない。

レベッカさんには悪いが、いろいろ質問させてもらおう。

「そういえばお金の単位をしりませんでした。銀貨1枚と白銅貨４枚と青銅貨7枚みたいな場合は、１４７なんとかって数えるんですよね？」

「おー、ジローくんお金の計算ができるんだね。やっぱり商人見習

いでもやってたのかしら、一般的にはあんまりそういう計算使わないから」

「え、じゃあどうやってるんですか？」

「だからそのまま。銀貨1枚と白銅4枚と青銅7枚、って数えるんだよ？」

うーん？　そんな難しい計算でもなくね？　お金の単位は「エル」だと教えてもらったけど、1銀貨＝100エルとか教えれば幼稚園児でもわかることじゃね？

あんまりっていうかぜんぜん算数が発達してないのかな。大丈夫か異世界人。詐欺に簡単に引っ掛かっちゃうぞ！

「でもレベッカさんはわかるんですよね、計算」

「私は傭兵団で団員への報奨金の計算とか少しやってたからね。簡単なものしかできないけど、お金の計算は得意よー？」

なるほど、納得。

ま、俺も最終学歴高卒様であるからして、算数は苦手だからな。しかも「読み書きそろばん」のうち、読み書きが完全アウトな異世界人！

そうこうしていると、銀貨3枚を握り締めたシェローさんが、買取所から戻ってきた。あとでこの金で必要な物の買出しをするそうだが、その前に神殿に連れて行ってくれるようだ。

じゃあ、神殿行ってパッと祝福うけちゃおうぜ！　とシェローさん。

ずいぶん軽いな。

第5話　異世界都市は地中海の香り（後書き）

主人公、高卒童貞無職という3冠王。けっして作者に投影しているわけではないです。けっして。

第6話　異世界神殿は妖精の香り

「サルディネーラ！」

神殿は街の中央広場正面に建っていた。そこそこ大きな建物――神殿というより教会みたいなイメージの建物――で、入り口には大精霊のシンボルらしきレリーフが飾られている（牛と蛇と鳥が合体したような謎モチーフ）。入り口から足を踏み入れると、神官と思しき女性がこちらに気付いて挨拶らしき言葉を発した。

「サルディネーラ！　久しぶりねシェロー、レベッカ」

気さくにシェローさんとレベッカさんに話しかける神官さま。

……しかし、俺にはもっと重要な案件が訪れており、まずはその件について頭を整理しなければならなかった。

神官は、細身の若い女性だった。ゆったりとした若草色のローブ。ローブの上には赤、青、白、緑の凝った意匠のカズラ。

髪は透き通るような輝くプラチナブロンドを腰まで伸ばしている。

切れ長の眼、白磁のような肌、緑の瞳、……そして、特徴的な長くとがった耳……。

……みなまで言うな！

ドワーフとか獣人とかが街を歩いていてた時点で、その可能性についてはいつだって考えていたんだ！
なんてったって異世界。どこからどう見てもファンタジー丸出しの世界！　となれば当然の帰結じゃん。
つまりあの神官は、あの耳がちょっぴり長くて、翳ってくださいと言わんばかりに耳なんか尖らせちゃってる神官様は！
エルフだ！　まごうことなきエルフ！！
ゆゆゆゆ夢にまで見た、えええエルフが現実に！　俺はついに手にいれた！　エルフの国をこの手に！　うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！
俺ディード〇ットとか大好きなんだよ！！
あｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌぽ；

――――しばらくおまちください――――

「ではそちらの方が祝福を受けるということでいいのね？」
「あ、はい。ジローといいます。よろしくおねがいします」

「なにモジモジしてんのよジロー。神官さまみたいなタイプが好みなのかしら？」

「ははは、こう見えても神官さまはお前の母親よりもまだ年上だぞ、おそらく。だいたい俺がガキのころ祝福を受けたときからこんな感じだからな、って痛い！」

歳のことを言われてシェローさんの耳を引っ張るエルフの神官さま。

歳のこととか全然気にしない種族かと思い込んでたけど、そうでもないのかな。萌えるな。

「そうね、ジローさん、そんなに緊張しなくても大丈夫よ。や・さ・し・く・してあげるから」

しかしこのエルフ、ノリノリである。森の賢者だとか、孤高の種族とか、そんな感じが全然ない。

背もなんか低くくて可愛いし、俺得すぎるだろＪＫ。

「冗談はさておき、それじゃあ始めちゃいましょうか。じゃあ、ジローさん、祭壇へどうぞ」

少し高くなった祭壇へ招かれる俺。可愛いエルフの神官ちゃん（推定年齢５０歳以上）の隣に立つ俺。俺のほうがちょっとだけ背が高いね神官ちゃん。フワッとハチミツみたいな甘い匂いがしてきて、２１歳童貞の俺には毒すぎるね神官ちゃん。

俺が脳内でいろんな妄想に花を咲かせているうちに、神官さまは瞳を閉じてなにやら呪文を唱え始めた。どうやら、このまま祝福の

儀式がはじまるようだ。
呪文を唱え終わると、「手を」　と両手を差し出してくる。俺はその手をドギマギしながら取った。
名前と年齢と性別を聞かれたので素直に「ジロー・アヤセ、２１歳、男」と答える。

一瞬、両手に熱を帯びたと思った次の瞬間、辺りをカッと光が包み、そしてすぐに止んだ。

神官はホッと一つ息をつくと言った。

「おめでとうございます。ル・バラカはあなたを精霊の御子と認め、祝福を授けられました。これより大精霊はいつでもあなたを見守り、あなたを助け、あなたを導いてくださります。実りある人生となりましょう」

「あ、ありがとうございます？」

……困った。こんな一瞬で祝福とやらは終わりなのか。ぶっちゃけぜんぜん変化がない。

祝福を受けてなにかが変わったという感じがしない。

やっぱ異世界人（チキュウジン）だしちょっと違うのかな？

「ジロー、それでどう？　天職はなんだったー？」

「この瞬間はいつ立ち会ってもワクワクするな！」

早く天職がなんだったかと教えろとシェローさんたち。
いやしかし、ぜんぜん変化なしなんですってば。どないせえっちゅうねん。

「シェローもレベッカもあせらないで。彼はまだ天職の見かたもしらないんですから……。ジローさん。集中して。『天職、天職、天職……』と念じてみてください。それで自分の天職を見ることができますから。最初は時間がかかるかもしれませんけれど、すぐに慣れますからね。慣れればすぐに”出せる”ようになりますよ」

またフワっとした説明だな。レベッカさんの説明はコレの受け売りか。
しかし、ともかくやってみるしかないか。

「天職、天職、天職……」

念じてみると、目の前にパッと半透明の石版のようなものが出現した。物理的に板が出るとは思いもよらなかったので驚いたが、内容も予想の斜め上だった。

板にはこうあった。

【　名前　】
ジロー・アヤセ

【年齢】
21歳

【性別】
男

【種族】
人間

【天職】
剣士（ソードマン）
魔術師（ウィザード）
鍛冶師（ブラックスミス）
細工師（クラフトマン）
詐欺師（トリックスター）
商人（トレーダー）
料理人（コック）
宝石学者（ジェモロジスト）

【固有職】
異界の賢者（ザ・ライブラリー）
〈スキル〉異世界旅行（ザ・ジャーニー）
〈スキル〉世界の理（ザ・プリンシプル）
〈スキル〉真実の鏡（ザ・ジャッジメント）

【バラカのお導き】
・猟師夫婦にお礼をしよう　0／2
・真実の鏡を使ってみよう　0／1

天職多っ！　しかもなんか凄そうな固有職まであるんですけお……。

しかもバラカのお導きって……。これってひょっとして、いや、ひょっとしなくてもＲＰＧでいうところの「クエスト」じゃね？　ご丁寧に進行具合まであるし。なぜだか全部日本語だし。

ワクワク顔のシェローさんとレベッカさん。神官さまも可愛い顔でどうだった？　と首をかしげている。なにこの可愛い生き物。俺がドンファンだったらここまでで２０回は口説いてるよ。

「えっと、この天職ってのでいいんですかね。なんか多いけれど……、剣士、魔術師、鍛冶師、細工師、詐欺師、商人、料理人、宝石学者……」

「ちょっ、ちょっと待ってジロー、多いってどういうこと？　今言ったのがみんな天職だって言うのー？？」

レベッカさんが困惑顔で聞いてくる。シェローさんも頭に？？？を浮かべている。神官さまが難しい顔をして俺に質問してきた。

「ジローさん、……天職は今言った８つあったんですか？」

「えっと、はい。８つです。……『天職』の括りで表示されてるので間違いないと思うんですが……」

「そうですか……。まず、一般的には天職は１人１つです。時々複

数の天職を持っている方もいますが、２つの天職を持っている方で３０人に１人、３つなら１００人に１人、４つ以上となると１０００人に１人いるかどうか……。まして、８つともなるとちょっと例がありません。『夢幻の大魔導師』ですら天職は６つだったと言われていますし……。あ」

突然「思い出しましたわ」　と言わんばかりに瞳を輝かせるエルフ神官ちゃん。なになに、急に近づいてこないで、童貞心がビックリしちゃうよ！

「ひょっとして……、『固有職』を得たんじゃないですか？」

さて……、どうするか。

第６話　異世界神殿は妖精の香り（後書き）

主人公がエルフ好きなのは、けっして作者の嗜好を投影しているわけではありません。けっして

第7話　異世界天職はチートの香り

「こゆうしょく？　ですか？　そういうのはアリマセンネ」

誤魔化すことにした。

可愛いエルフちゃんに嘘を付きたくはなかったが、「異界の賢者です！」　とか不審すぎるだろう。異界てのもストレートすぎるしな。

そうですか……と、なぜかちょっと残念そうなエルフをギュッと抱きしめてお持ち帰りしたいのをグッと我慢して、逆に質問した。

「固有職って、天職とは別にそういうのがあるんでしょうか？」

我ながらわざとらしい質問だが、訝しがることもなく答えてくれたことによると、４つ以上の天職を得た人の中には、天職の他に「固有職」というその人だけの職を得た人がいたらしい。エルフちゃんが知ってるのは、『悪意の沼（ザ・ヴェノム）』『夢幻の魔導師（ザ・ミラージュ）』『影（ザ・シルエット）』の３つで、中でも夢幻の魔導師ってのは、１００年以上前にエリシェで祝福を受けた有名人なのだそうだ。

悪意の沼だの影だのという、なんとなくヒールの気配がする連中は、昔話に出てくるような大昔の人で、伝説だけが残っているんだとかなんとか。

「固有職を得ると、１つだけその人だけが使える特別なスキルを得られるようになるらしいんです。『夢幻の大魔導師』はそのスキルを使って、たった一人で千の軍勢を止めたと聞いたことがあります。スキルの名前は伝わっていないのでわからないのですけれども……」

１つどころか、３つあるんですけど……。スキル……。

やっぱ内緒にしておいてよかったな。千の軍勢を止める力はなさそうだけど、変な注目を集めるのは間違いなさそうだし、いや、エルフちゃんの注目を浴びるのはやぶさかでもないんだけれどね、一般人の熱視線はいらないや。商品仕入れに行く時以外は家に引きこもってたから、視線とかちょっと苦手なんですよね。

固有職の件は「なるほどすごいものなんですネー」とわざとらしくかわし、気になっていた件を聞いてみることにする。

「ところでですね、祝福を受けても、特になにが変わったという感じもないんですが、天職を得るとどういった違いがあるんですか？

僕、全然体感できないから不安で……」

「それは天職に対応した職業に実際に就くか、修行するかしなければ、なかなか体感はできませんよ。天職は要するに『その職の才能がある』ということですから」

「才能ですか。あ、普通はもっと若く祝福を受けるって言ってましたね。つまり天職があっても、それを若いうちから磨かないと大したアドバンテージにはならないって意味だったんですね……」

「普通は１０歳で祝福を受けますから……、そういう部分は確かにあります。けれど、悲観的になる必要はありません。天職持ちはお

よそ5倍は速く物事を吸収して成長ができますからね。まだこれから良い経験をいくらでも積めますし、成長したいという気持ちがあるのなら、苦難もまた楽しく感じられるはずですよ」

「ご……、5倍ですか。それはすごいですね……」

なるほど。

5倍の効率があるなら、そりゃあ天職以外の職は仕事にしないよなぁ。でも逆に言うと、天職が出た職にしか就けないということなんじゃないか？　俺の天職に詐欺師ってあったけど、詐欺師オンリーの天職の人って相当微妙じゃね？　地元じゃ「あいつ詐欺師だぜ」と囁かれ下手すりゃ村八分だ。なにをしても信じてもらえず、誰も自分のことを知らない町から町へ詐欺を働きながら世界を旅する根無し草。この詐欺師の才能が憎い！　どうしてこんなに簡単に騙せちゃうんだよぉぉぉぉぉぉぉぉ！　とか言いながら日々を過ごすのか。人事ながら可哀想になってきたわ。天職システム酷すぎるだろ。

「5倍って言っても、伸び代は人それぞれだわよジロー。効率の良い修行してなきゃ、天職なしでも努力してる子にはかなわなかったりするものよ？　傭兵団の中には戦闘系の天職持ちじゃない人もいたけど、けっこう努力や経験でカバーしてたしねー。まあそれでも努力してて経験も積んでる天職持ちにはなかなかかなわないんだけどさ……」

まあ、確かにそうかもしれない。毎日1時間修行する天職持ちと毎日5時間修行する天職なしが同列であるなら、絶対に覆せない差ではなさそうではあるな。毎日1時間の勉強すらできずに高卒ニートになった俺だからわかる。

――しかし天職８つか。どの天職もまあ、いちおう心当たりがあるというか、長いニート暦のなかで齧ったことがあるようなものがほとんどだったりするのがアレだけど、そんな簡単なことでいいんだろうか。

あ、魔術師だけは心当たりないな。

いや……待てよ、ひょっとしてあれか？　２０歳過ぎて童貞だから魔術師の才能があるとか出たんのか？　え？　マジで？　そういう基準で魔術師になっちゃうわけ？　１０歳で祝福受けて魔術師の才能あったら絶望するんじゃね？　ヤラハタ（ヤラずにハタチの略）確定じゃね？

さっき魔術師の天職もあるって言っちゃったけど、あれって「自分童貞です」（キリッ）　て宣言したもの同然だったんじゃね？

天職システム酷すぎるだろ。

うわぁあああ

◇◆◆◆◇

エルフ神官ちゃんに「僕のことは内緒にしてください。天職が８つあるとかで注目を浴びたくないんです」とお願いして、神殿を後にした。本当はお布施をするものらしいんだけど、今のところは一

文無しだからと免除してもらった。ま、稼いだらエルフちゃんが惚れるくらいお布施しちゃるわい。

「さあ、ジロー。次はギルドに行くんだが……、どこのギルドにするんだ？　それだけ天職があるとどこでも選べるが」

とシェローさんに神殿を出たところで聞かれる。

「商人の関係のやつでお願いします。……えっと、そのギルドではなにをするんでしたっけ？　すみません無知で」

「よそから来た人間はギルドで登録して住人登録をするんだよ。そうすれば、この街で商売をしたり就職したりできる。本当は他の都市から来た人間は紹介状がなければ登録できないがな、まあ、そこは上手く紹介してやるよ」

「なにからなにまで本当にありがとうございます。本当に助かります」

俺がお礼をすると、突然『天職板』（俺命名）が目の前に現れる。天職板は淡く光っており、良く見ると「バラカのお導き」の「猟師にお礼をしよう０／２」が点滅しており、「猟師にお礼の品を贈ろう１／２」にヌルッと変化した。猟師にお礼をしたことによりクエストが進行したらしい。次はお礼の品を贈ればコンプリートか。

「じゃあ、商工会議所に行くとするか。中では俺がジローを紹介するからな。適当に合わせてくれ」

「は、はい。よろしくおねがいします」

◇◆◆◆◇

商工会議所は思いのほか大きな建物だった。レンガ作りのちょっと洒落た建物で2階建て、無骨な石作りの建物が多いエリシェの街の中ではなかなか存在感がある。

入ってすぐの受付でシェローさんが「トビーはいるかい？」と受付嬢に声を掛けると、奥のほうからシェローさんより少し年下くらいか、３０歳前半くらいのメガネの男を呼んで戻ってきた。

「仕事場ではトバイアスと呼んでくれよ、シェロー。こっちに顔を出すなんて珍しいじゃないか。しかもレベッカさんも同伴で……。レベッカさんもお久しぶりです」

「久しぶりねー、トビー君。今日はちょっとお願いがあってきたのよ」

「お願い？　また魔結晶の買取りですか？　それならこっちも得にはなれど、損はしないからいくらでも受けさせてもらいますよ」

「ああ、違う違う、今日は全く別件なんだが……。おい、ジロー」

シェローさんに呼ばれてトビーと呼ばれた男の前に出る。シェロ

ーさんともレベッカさんとも親しげに話をしているから、旧知の仲なのだろうか。メガネの奥の目は鋭く、一筋縄ではいかない気配を漂わせていて隙がない。

「このジローはレベッカの姉の子、つまり甥なんだがね、エリシェで商人をやる為に帝都から出てきたんだが、途中で強盗に襲われて斡旋状を奪われてしまってな、いや参った参った」

「……つまり斡旋状なしで登録してほしいってわけかい？　シェロー？」

うわぁ、なんかこの嘘わざとらしくね？　しかもレベッカさんの甥設定て無理あるだろ。似てないを通り越して人種が違うレベルなのに……。せめて俺にも一言言っておいて欲しかった……。

シェローさんが頷くと、胡散臭そうに俺をジロジロ見てくるトビー氏。どう見ても嘘が見破られてます。本当にありがとうございました。

シェローさんに任せるのは無理くさいと判断。脳筋キャラに交渉を任せた結果がこれだよ！　俺がなんとか補足して、トビー氏を納得してもらうしかねぇ。

「……トバイアスさん。実は僕は記憶を失っておりまして、このシェローさんやレベッカさんの甥……らしいのですが、その記憶がないんです。斡旋状という物も持っておりませんから、状況証拠から考えると強盗に襲われた際に頭を強く殴られたかして記憶を喪失したと考えるのが妥当なのですが……」

「つまり、君がレベッカさんの甥だというのは、シェローとレベッ

カさんの証言しかないというわけだね？」

「……証拠はなにもありませんから。」

俺がそういうと、トビー氏は瞳を閉じて少しだけ思案し、言った。

「……レベッカさん、彼は確かにあなたの甥で間違いありませんか？」

「そうよー？　ジローは間違いなく私の甥だわ。目元なんかジェシカ姉さんにソックリ」

あっけらかんとした調子で肯定するレベッカさん。

「……そうですか……。確かに着ている服は帝都の物だな……。君、ジロー君と言ったかな。商人に関係する天職はなにか持っているのかい？」

「あ、はい。商人（トレーダー）と宝石学者（ジェモロジスト）です」

と、とりあえず二つだけ言っておくことにする。またツラツラ８つも言っても逆に不審だしな……。

商人と宝石学者を選んだのは、まあ、単純に仕事になりやすそうな天職だなと思ったからに過ぎない。細工師や鍛冶師でも良かったけど、そうすると商売ってより職人仕事になっちゃうしな。

「ほう、ダブルジョブでしかも宝石学者とはね……」

ジッと僕の目を見つめるトビー氏。ジッと見つめ返す俺。

緊迫した雰囲気が続いていたが、フゥと息を吐きシェローさんを

見て観念したように肩をすくめてトビー氏は言った。

「……ま、そういう事情なら仕方がないなシェロー。ここはお前の顔を立てて俺の権限でその子を登録してやるよ。……今度なんか奢れよ？」

どうやら、なんとか上手くいったらしい。

記憶喪失というところを明かさないと、善良なシェローさん夫妻を騙している不審者にしか見えないからな……。

トビー氏はシェローさんの嘘には気付いていただろうが、シェローさんとレベッカさんが俺を保護しようとしているという意図を汲み取ってくれたというわけだ。良い人でよかった。

登録方法は青白い金属板に血を垂らして、それを職員が奥に持っていき、暫くして戻ってきた職員の手には二つに割られた先ほどの金属板があり、「これがギルドカードとなります」と言われ片方を渡され、あとは羊皮紙に名前と天職を記入し、それだけで終わってしまった。

ギルドカードはいわばエリシェでの住民票に近いものらしく、これがあれば店も立ち上げられるし、就職もできるし、家を買ったりもできるんだそうだ。俺始まったな。

さぁて！　祝福も受けた。ギルド登録もした。

しかし、そろそろ一回家に帰らないとなぁ。昨日は無断外泊だったしな……。

第8話　異世界店舗は興奮の香り

「お2人のおかげで祝福も受けれましたし、ギルド登録もできましたし、この街で活動する資金もできました。……お礼といってもこんなものしか持っていないんですが、よかったらこれを使ってください」

と言って、店で売らなかったボウイナイフをシェローさんに渡す。これをシェローさんが受け取れば、「猟師にお礼の品を贈ろう　1／2」の”お導き（クエスト）”のクリアとなるはずだ……。

◇◆◆◆◇

商工会議所を出てから、3人でお昼を食べに行くことになった。無一文の俺としては、これ以上の借りを作るのもあれだったので、断ろうとしたのだが、「若いもんが遠慮してんじゃないよ」とレベッカさんに押し切られてしまい、異世界外食初体験と相成ったのだった。

シェローさん御用達の店は、商工会議所から10分ほど歩いた場所にあった。

パッと見の印象は屋台村。石畳の上に置かれたテーブルやら長イ

スに、客が思い思いに陣取って飲食している。
料理は道沿いの店舗で買うか、注文してから運ばれてくる方式のようだ。道幅せいぜい５ｍあるかどうかというところにテーブルやらイスやら置かれ雑多な客達が飲食しているせいで、かなり窮屈な印象がある。
なんだこれ、今日は祭りか？

レベッカさんが食べ物を注文に行くのについていくことにした。半分は食事の値段のリサーチの為。半分は興味本位で。
レベッカさんが慣れた調子で注文していく。

ギョーム（鶏みたいな肉）の串焼き５本で２０エル。パエリア（のような米料理。具沢山で美味そう。なんか赤い）大盛り２杯で４０エル。豆のスープ３杯で１５エル、ナンみたいなパン３枚で１５エル。リリアラム（赤い果物）３個で１０エル。

しめて、１００エルなり。
つまり銀貨１枚だ。あれ？　銀貨３枚で半月分の食費とか言ってなかったけか。買いすぎなのか、それともここが高いのか？　シェローさんちの家計が心配です……。
つか、１食で半月分の食費の３分の１使っちゃってるんですけど……。

テーブルではシェローさんがセルフサービスらしい茶を用意してくれていた。飲んでみると香ばしくて美味いが飲んだことのない味の茶だった。茶葉を見たら猫ジャラシに似ていたので、とりあえず猫ジャラシ茶と命名しておこう。

鏡の屋敷がガチ西洋風だったから、西洋的な文化の世界のイメー

ジがどうしても拭えないんだけど、実際はどうも猥雑だ。
茶碗で茶を飲むし、普通に米があるしな。……まあ、こういうほうが好みだからいいんだけども。

そうこうしているうちに料理が運ばれてきて、みんなでいただいた。

――どれもこれも予想以上に美味しい！

ギョームの串焼きは硬めの鶏肉という感じだろうか、ウイキョウに似た香草と塩で味付けされていて、風味がいい。
パエリアは赤い見た目に反してマイルドな味わいで、やわらかく煮えた香味野菜とかたまり肉も味が染みている。米は日本米よりタイ米に近いようだ。
スープには豆のほかに卵も入っていて健康に良さそうだ。
ナンのようなパンは、ナンというよりは、ピザの耳の部分という感じだった。うっすらと油が垂らしてあり、オヤツ代わりにこれだけで食べても良さそうなくらいだ。

やばい、異世界やばい。食い物超美味い。
銀貨1枚だから高いかとも思ったけどこの味なら納得だわ。それに量も半端ねえ。
パエリアの大盛りって米5合分くらいあるんだもの。それが2つ、つまり1升分くらいあるんだぜ。まったくシェローさんもレベッカさんも大変な健啖家だよ。

3人でガッツ食いして完食。

最後にデザートとしてリリアラムというフルーツをいただいた。

見た目はマンゴーに似ているが、マンゴーより酸味の強い少し硬めフルーツで、この辺では食後に良く食べるものなのだそうだ。サイズも大きめ（リンゴより一回り大きいくらい）のこれが１個４エル、３個でまけてもらって１０エルだった。

しかし、１エルの価値が日本円に換算してどれくらいなのかいまいち掴めない。日本だったらぱあのパエリアなんて１杯３０００円以上すると思うけど（なにせ量が量だ）、それで試算すると１エル＝１５０円だ。

最小単位が１５０円ってありえないだろ……。いや……ありえるのか？　異世界に地球の常識を持ってきても詮無きことなのかな？？

まあ、ひとまずこの件は保留としよう。日本のものを売却すればその額で判断できるだろうしな。

◇◆◆◆◇

「シロー。いくとこないんだろうし、しばらくはうちに居候していてもいいわよ。ベッドもあるし……。街からはちょっと遠いけれどね」

食後の茶を飲んでるときにレベッカさんが唐突に切り出した。シェローさんもウムウムと頷いている。

提案としては非常に嬉しい。見ず知らずの、記憶喪失で、内陸の服を着てて、天職が８つもある、正体不明の小僧に対しての待遇と

しては、なんというか良すぎる。良い人すぎて不安になるレベルだよ。

でも、さすがにそんなに甘えるわけにもいかないし、なんと言っても一回家に帰らないといかん。親になんにも言ってないし、ネットオークションに出品中のものもそのままだし。

折角の厚意に心苦しい限りではあるが……。

「僕みたいなものにそうまで言ってもらえるのは、非常に嬉しいんですが、さすがにそこまで甘えるのは心苦しいので、なんとか自分でがんばってみようかと思っているんです。この手持ちの品を売れば少しはお金になると思いますので……」

そう言って自衛の為と思って数本持ち込んでいた自作のナイフをテーブルに広げた。

――ナイフ作りとの出会いは中学1年生のころだった。

中学の時の部活の顧問が技術教師で（数学も教えていたが）、その彼が副業でカスタムナイフビルダーをやっていて、放課後にナイフを作っているのを見ていたらいつの間にか自分もハマってしまい、今でも半年に1本くらいのペースで作り続けている。

まあ、その技術教師と今だに付き合いがあるから材料を安く譲ってもらったり、工具を貸してもらったりして、ニートになっても続けられているんだけどな。鋼材はともかく電動工具なんかは自分じゃなかなか買えないし。

シェローさんが興味深そうに大振りな一本を手に取り、品定めするように見始める。

武器になりそうなもの……、と思って、手持ちで一番刃渡りの長いボウイナイフを持ち込んだ物だ。
全長で３５ｃｍ、刃渡り２０ｃｍの分厚いナイフで、個人でこのサイズを作る人はあまりいないかもしれない。日本で持ち歩いたら発見次第即御用だが、自分で愛でる用に作ったから問題はない。
鋼材はＡＴＳ－３４。ナイフ用ステンレスの定番だ。
シース（革のさや）も自作。牛革製で細かいカーヴィングも施してある自慢の一品だ。

「良いナイフだな。仕事柄刃物はいろいろと見てきたが、こんな顔が映るほど磨かれた刀身は初めてだ。作りも丁寧だし、かなり高価（たか）い品なんじゃないか？」

と、ある意味刃物のプロとでもいうべきシェローさんにも好評なようだ。

「かなり高価」がどれくらいの金額を指すかはわからないが、無名の素人の自作品なので、たとえネットオークションに出しても１万円にもなれば良いほうだろう。まあ、ネットでなんか売る気もないけど。

「記憶がないもので、どういう謂れの品かはわからないのですが、僕も良い品だと感じます。何本か売って、しばらくの活動資金になれば……、と思うのですが」

「そうだな。これならばかなりの金額になるだろう。知り合いの道具屋のところで頼んでみよう」

「あ、ありがとうございます！」

◇◆◆◆◇

こっちの世界に持って来ていたのは、例のボウイナイフの他には、小ぶりのドロップポイントのシースナイフを2本、中サイズのハンターナイフが1本である。ボウイナイフは特別手が掛かっている品なので売るつもりはないが、シースナイフとハンターナイフは売ってしまうつもりだ。

全部で金貨1枚にでもなればしめたものだが……。

シェローさんの知り合いの道具屋は、予想に反して大店だった。

どうしてもRPGの印象で物事を考えるからか、例の大作RPGの道具屋的なものを連想してしまっていていかん。「いらっしゃいませ。ここは道具屋だ。なににするかね。ここで装備するかね。120Gだがいいかね」みたいな、オッサン1人でやってる5坪くらいでやってるちっちゃな店をね。

道具屋は「ミーカー商会」と言い、このへんでは一番大きい店なのだそうだ。中に入ってみると、道具屋というよりは武器防具の店といった感じだった。

店内は5坪どころか30坪くらいはありそうだ。売っている品物は……、RPGだコレ。

「ここは武器防具の店だ。なににするかね。ここで装備するかね」っていうアレだコレ。

剣、ナイフ、槍にメイスにワンドに斧に鎧に盾に篭手にスネ当て。外套も服も靴も売っているし、旅に使うであろう道具、寝袋やロープや鍋とか食器とか、照明に使う松明やらランタンやらもある。

……楽しい！！

俺こういう店大好きなんだよ！

ここでなら半日は時間つぶせるわぁ。

夢中になって武器や防具なんかを見ていると、シェローさんが呆れたように呼びに来た。

……すみません、つい夢中になっちゃって……。ほんとこういうのに目がないんですよ……。

シェローさんが店主に渉りを付けてくれ、ナイフは買い取ってくれるから、とにかく見せてみてくれとのこと。

ボウイナイフ以外のナイフを取り出して、カウンターに並べる。

店主は４０がらみの筋骨隆々のハゲ親父だ。強そうな見た目に反して、目つきは優しげだ。

「……このへんでは見ない品だな……。とすると内陸産か、あるいは山岳のほうの作か……？　いったいどうなっとるんだコレは」

などとブツブツ言いながら検品を行っている。

すみません、それ地球産なんですよ。厳密には俺作なんです。――――とも言えないので、黙って検品するのを見守った。

どうやら事前にシェローさんが俺が記憶喪失だと言ってくれてあったようで、必要以上の詮索をされることもなく査定が終了した。

「待たせたな。――――結論から言うと、こいつを売ってくれるなら全部で金貨１０枚出そう」

「えっ！？」

軽く絶句してしまった。１０枚！？

金貨１０枚って日本円に換算して……、さっきの暫定的な試算の１エル＝１５０円で計算するとあんた、金貨１０枚はつまり１０００エル……。

……１５０万円やで。

「――ああ、勘違いするなよ。ナイフとしての価値で言うなら金貨１枚くらいのものだぞ。……ただな、このナイフの製法は今のところまだこの国には伝わっていない、俺でも始めて見るものだ。さらに鋼材もわからん。比重から考えると鉄のようなんだが……。ハンドル材も見たことがないものだ。要するに、なにからなにまで謎だってことだ」

そりゃあそうだろうな。鋼材は日本製のステンレスだし、ハンド

ル材はマルカイタ（米製の人口合成素材）なんだから。

「……つまり謎を買い取ってくれるというわけですか？」

「謎、というよりは信用だな。記憶喪失ということだが……、例えばだな、お前がこいつを『帝都』か『山岳』あたりからサンプルとして持って来る途中で記憶を失ったものとする。それで、無一文だからとうちに持ちこまれたとして、新しい技術の粋を凝らして作られたものと解っているのに買い叩くわけにはいかんだろう。店の信用と、なによりプライドの問題としてな。だから金貨１０枚だ。ま、そのかわり、このナイフの製法については研究させてもらうがね」

なるほどな。確かに俺が商人でよその国から新しい品を売るためのサンプルを持って来た使者とするなら、記憶喪失なのをいいことにカモネギよろしく買い叩くってわけにもいかないんだな。

しかし、サンプルとか言うってことは、俺が商人に見えるってことなのかな？

「商人でなけりゃ、あれだけ熱心に店の商品をチェックしたりはしないさ。記憶を失ってもそういうところは変わらないものなんだな！」

と、ワハハと笑う店主。

なるほどねー。ただの物好き（アイテム好き）なだけなんだけどな。商人の天職はあるけれど。

ま、高く買い取ってくれるのだから、素直に甘えさせてもらうことにしよう。これで当面の活動資金には困らなそうだから、素直に嬉しい。

しかも金貨だったら、ひょっとして向こうに戻ったら換金できる

かもだし……な！

「じゃあ商談成立だな。ちょっと待っててくれ」

そう言って金貨を１０枚取り出し、青い巾着袋に入れてくれる。
それを受け取りズッシリとした重みを感じながら、シェローさんとレベッカさんに向き直って言った。

「シェローさん、レベッカさん、本当に何から何までありがとうございました。お２人のおかげで祝福も受けれましたし、ギルド登録もできましたし、この街で活動する資金もできました。お礼といってもこんなものしか持っていないんですが、よかったらこれを使ってください」

そしてバッグからボウイナイフを取り出しシェローさんに渡した。

第9話　異世界クエストは現実の香り

「いいのか？　いや、嬉しいが、これはお前の記憶を取り戻す鍵になる品なのかもしれないんだぞ？」

「あ、はい」

あ、はい。じゃねえええええ。

記憶喪失設定なのに持ち物簡単に手放しちゃオカシイってことに、全く考えが回らなかった……。

でもまあ……、実際には記憶喪失ではないのだし、いいか！

もう、そういう人ってことで理解してもらおう！

「そうですね。今のところはそれを持っていてもなにも感じるところもありませんし、構いません。記憶のことは少しづつ取り戻せば良いかと思っていますしね」

シェローさんは一応それで納得したのか、それとも意外とナイフが欲しかったのか、それ以上の追求はせずナイフを受け取ってくれた。

受け取ってくれたことによって「これでクエストクリアとなるん

かなー」と考えていると。

突然輝きだす俺とシェローさん。

そして浮かび上がる俺の天職板。

そして……。

ポンッ。

と小気味良い音を立てて、天職板が手のひらサイズの可愛い妖精さんになった。マジか。おちつけ。

「よおよお、はじめましてだな。アホみたいなツラしやがって。ハイこれオメデトウの品物。大事にしなくてもいいけど”ハジメテの精霊石”は記念に取っておく奴が多いらしいぜ。じゃあな。これからも世のため精霊様のためにガンバッテくれよ」

ポンッ。

……え？

なにいまの？　白昼夢とかの類かな？

手のひらに青い石みたいのが乗ってるから夢じゃないのかな？

助けを求めるようにシェローさんのほうを見ると。シェローさんの手にも俺のと同じような石が乗っていた。……どゆこと？

「シェローさん、今のは？」

と聞くと、俺の手に石があるのを認め、肩を抱くようにして言った。

「おお、ジローもお導きを達成したんだな、おめでとう！　俺のほうも今達成となったよ！」

「えっと？　つまりどういうことです？」

興奮しているシェローさんを横目にレベッカさんが詳しく説明してくれた。

お導きを達成すると、天職板が精霊の形を宿し、その精霊が達成の記念として「精霊石」という石をくれるのだそうだ。この精霊石は大精霊の加護そのものと考えられていて、見た目がまるっきり宝石ということを抜きにしても、非常に高額で取引されるものなのだそうだ。

なので人々はお導きがあれば、みな積極的にそのお導きを「達成」しようとがんばるものなのだそうで。

シェローさんの手にも精霊石があったのは、彼もまたお導きを達成したからで、そのお導きってのはつまるところ……、俺との出会いのところから発生したクエスト……ってことだよなぁ。確かにお導きに遵っているだけとかなんとか言ってたけれどもなぁ……。

「……そうだったんですかぁ……。ふふふ」

俺を助けてくれたのが彼の無償の善意だったわけではないことに

微妙な落胆を覚えているらしい自分のピュアさになんだか笑えてきてしまっていた。

そんな事気にするようなタイプじゃないと思ってたんだけどな、自分のこと。

それに……、実際結果オーライなのだし、俺なんて記憶喪失という嘘をついているんだしな。固有職のことだって隠しているし。

だからなんか言えたような義理でもないんだけどな。

やっぱなんだかんだ言っても慣れない異世界で心が弱ってたのかな。

急にどうでもよくなってきちゃったな。……もうとにかくすぐに日本に帰りたくなったなぁ。

そう思ってしまったら、もうどうにも駄目で。

「……それでは、本当にありがとうございました。また、落ち着いたら伺わせていただきますね。それではっ」

そう言って身を翻し、2人から逃げるように店を出た。

いや、実際に店を出てから全速力で走って逃げた。

後ろでレベッカさんが「ちょ、ちょっと待ちなさい」とか言っているのが聞こえていたけれど、呼び止められるほどに、もう止まれなくなってしまった。

自分でもよくわからない気持ちに支配されていた。

走って走って走って走って、一気に街道に出て、そこからも休まず走って鏡の屋敷に辿り着いた。

そうして1日ぶりに自分の部屋への帰還を果たしたのだった。

◇◆◆◆◇

部屋に帰ってきて、母親に無断外泊の件を適当に弁明して、コーヒーを飲んだらもう普通に落ち着いてしまった。
我ながらいったいなんなのかと思う。心が弱すぎるから、あんなことで逃げ出したりするんだと理解はできるけれど、だからといってなにをするつもりもありはしなかった。

今は金貨と精霊石とギルドカードを机に並べている。

シェローさんとレベッカさんから、事実上逃げてきてしまった件については、ひとまず自分の中で保留とすることにした。バイトばっくれ経験多数の俺にすれば余裕でした。
……もう少し落ち着いて、自分のなかであの感情を噛み砕くことができたらまた挨拶に行くことにしよう。

いよいよ、これからの異世界での商売について考える。

今、手元にある資金は、異世界の金は金貨が１０枚。あと一応換

金できるらしい精霊石がひとつ。日本円はコツコツ貯めた虎の子の87万円。
この資金でうまいこと商売をはじめたいわけだが……。

しかし、実際に商売を始めるとなると、まずは誰かしらか事情の知る協力者がいないと辛いものがあるんだよな。いちいち記憶喪失だからとか言い訳しながら情報収集するのに疲れたってのもあるし、なにかあったときのためにボディガードも欲しい。
剣士の天職があるから向こうで修行するって手もあるけど、生兵法は大怪我の元ともいうしな。やめておいたほうがいいだろう。
剣は欲しいが。

身を守るにはやっぱ傭兵でも雇うのがいいのかな？　でも傭兵ってのもなぁ……。なんか裏切られて後からバッサリ！　みたいなイメージがあるしなぁ。
傭兵なんかより、神官ちゃんとかがアルバイトでやってくれないかなぁ。「こここれも仕事のうちだよ。だよ」　とか、いろいろ楽しそうだけどなぁ。

――そうだ。エルフだ。
商売もいいけど、エルフのこと調べないといかん。神官ちゃんしかまだエルフ見てないから、どれくらいの割合で街にエルフ住んでるのかわからないけど、エルフ見つけてお友達にならないといかん。なんなら金貨の1、2枚もちらつかせてでも……。

ハッ！　いかんいかん。

まあとにかく一度神官ちゃんのところに行って、エルフ情報を聞いたり、記念写真撮ったりしてこよう。そんでブロマイド作ってこっちで売ろう。隠し撮り写真集とかでもいいかもしれんな。1万部

くらい売れるんじゃないかな。

ハッ！　いかんいかん。

あと活動拠点をどうするかも考えないといかん。とりあえずは鏡の屋敷でいいのかもしれないけど、屋敷の権利とかどうなってんだ。異世界のそういうのってよくわからんぜ……。いずれトビー氏にでも聞いてみよう。

そんで俺、エルフと新婚生活するんだ……。

とにかく、最初は異世界での足場固めをすることにしよう。お金稼ぎ自体は向こうのほうが容易ではあろうし、軍資金も多い。

こっちでの活動は後回しだな。

……いや待てよ。

こっちの世界ではまず種まきからやっておくか……。

俺はＰＣを立ち上げると、いきつけの巨大匿名掲示板群にスレ建てするのだった。

【速報】俺んちの鏡が異世界と繋がった

１　：名も無き妖精

今朝起きると部屋にある鏡が異世界へ繋がってたんだけど

なんかアドバイスある？

第１０話　異世界金貨はプチブルの香り

2 ：名も無き妖精
鏡叩き割って寝ろ

3 ：しまった！ここは糞スレだ！

＜○√
＝
くく

オレが止めているうちに他スレへ逃げろ！
早く！早く！オレに構わず逃げろ！

4 ：名も無き妖精
異世界のお姫様の着替えシーンが覗けるんですよね

5 ：名も無き妖精
いいからはやく写真うｐしろｙ

6 ：名も無き妖精
この手のスレ何度目だ
雑談スレでやれ

～～糞スレ終了～～

7：孤独の俺◆４ｎｏｉｇ３２９ｄｅ
どんなふうに繋がってるのか詳しく説明してくれよ
見えてるだけなのか向こうにいけるのか
全身鏡なのか手鏡なのかでぜんぜん違うだろ

8：名も無き妖精
ネタにマジレスカコイイ

9：名も無き妖精
どんな風に繋がってるとか・・・・
１本のスジに決まってるだろう

10：名も無き妖精
通報しました

11：名も無き妖精
１まだぁ？

12：1
鏡から異世界行ってきました
鏡の向こうは中世の屋敷（廃屋）だったよ
そこにいた異世界生物の写真撮ったからうｐしとくよ
今からもっと冒険してくる！
他にもなんか面白いもん見つけたら写真撮ってくるわ
＜画像アドレス＞

13：名も無き妖精
向こうに行けるって設定か

　１が向こうに行ってる間に鏡割っておいてやるよ

１４：名も無き妖精
グロ貼るなボケェ

１５：名も無き妖精
怖くて開けないんですが、どんな画像？

１６：名も無き妖精
でかいゲジゲジ

１７：名も無き妖精
ゲｗｗｗジｗｗｗゲｗｗｗジｗｗｗｗ
どう見てもクモだろこれｗｗｗｗｗ

１８：名も無き妖精
なにこれ？

１９：名も無き妖精
あし多くね？
あし多くね？

２０：名も無き妖精
ガチじゃんコレ

２１：名も無き妖精
１はプロＣＧクリエイター

２２：名も無き妖精
＜＜２１

よかった・・・・・脚の多い巨クモはいなかったんや・・・・

２３　：孤独の俺◆４ｎｏｉｇ３２９ｄｅ
やけに展開早いな！
気をつけて行って来いよ！

２４　：名も無き妖精
さっそくこのクモ擬人化しようぜ！

２５　；名も無き妖精
異世界の蜘蛛だから
異蜘(いく)たんですね

２６　：名も無き妖精
イクッ！イクッ！イッちゃう！

２７　；名も無き妖精
いい加減にしろよ

そこはアナザーワールドのスパイダーだから
アナルちゃんだろう

２８　：名も無き妖精
なぜそうなるｗｗｗｗ

こんな調子でレスが続いていく。

よかった、アホばっかりで。

とりあえずスレのほうは適当にレスしながら運用するとして、写真が足りないから次はちゃんと撮影もしなきゃな。

◇◆◆◆◇

今日は異世界には行かないことにして、こっちの世界のことを整理することにした。

オクで出しているものは一度すべて引き上げておく。幸い入札入ってる商品がなかったから助かった。

親にはちょっとデカい仕入れ先を開拓したからしばらく留守がちになると言っておく。まあそれで嘘ではないからな。

あと、部屋には絶対入らないように釘を刺すことも忘れない。まあ、母親にそんな釘を刺してもまさにヌカ釘なんだけどな。入ってくるときはどんどん入ってきちゃうだろうし。普段は鏡には布でもかけて隠蔽しとこう。

次は金貨について調べた。

まず金貨の重さが１つ４０グラム。本物の金、つまりこの世界の金と同じ金属元素で且つ純金製なのだとすれば、今の大体の相場の１グラム４０００円で換算したとして、なんと１６万円にもなる。１０枚で１６０万円だ。まあ、これはあくまでも超楽観的な試算だけれどもな。

もしもこの金貨を売るとして、そもそもこんな正体不明な品がオクで売れるのかという心配があった為、ネットオークションで「金貨」を検索。

……あ、ダメだコレ。

出品されているものは、当然といえば当然か、正規品（信用ある機関で発行された保証書付きの金貨のことね）ばかり。

中には胡散臭いものも出品されてはいるんだけど……。と、いろいろ見ていると添付画像に興味深いものを見つけた。

ゴールドテスター。

金の持つ運動エネルギーを電気化学的に演算してうんたらかんとかで、金の含有率を調べられる便利な機械なのだそうだ。こんな便利なものがあるとは、と検索をかけてみたら驚きの２４万円。高けぇ……。

しかし、これがあれば２４カラット（純金）まで計測ができる。この金貨が何カラットかはわからないが、仮にこれで計測して２４カラットなら、相当に美味い。とりあいず、機械を持ってそうな金買取センターにでも持ってってみよう。

次は精霊石。

無加工の宝石のような青い石だ。つーかラピスラズリの原石なんじゃねーのかなコレ。ブラック企業にいたころ数回扱ったことあるわ。

精霊石っていうからには、特別になにか効果があるのかどうだかわからないけれど、ただのラピスラズリの原石だとしたら価値としては大したことない。サイズも小さいし。

そういえば、シェローさんの手にあった石は青くなかった。もし、お導きをクリアーするたびに宝石の原石がもらえて、もらえる石がランダムだった場合、「当たり」の石に当たったらすごいぞ。石のサイズはだいたい拳大だけど、もしダイヤモンドでこのサイズの石だったら「億」もあるで……。

そんなでかいダイヤを売れるツテがあればの話だけどなー。

とはいえ精霊石は宝石なのか、それとも魔法の石なのか、ちょっと情報が足りないのでこれも一旦保留として、まずは金貨の価値を調べるために金貨1枚を握り締めて家を出た。

家の軽自動車に乗って隣町の金買取センターに向かう。隣町にしたのは、売ろうとしている商品があまりに出所不明で怪しいからだ。まあ、とりあいずはまだ売る気はないんだけどな。一応の用心ってやつだよ。

金買取センターは、質屋然としており、表からは中の様子がわからない。こういう店のほうが出所不明な貴金属とか売りやすそうではあるな。駐車場に車を止めて、サッと入る。

窓口の店員に、金の買取を頼みたいと金貨を見せる。

たんたんと検品してから件のゴールドテスターを取り出す店員。固唾を飲んで見守る俺。頼む！　頼むぞー！　２４金来い！！

「お待たせしました。こちら２４カラットのゴールド４０．３グラムですね。本日の金の買取金額がグラム３８２１円ですから、査定額は多少色を付けされていただいて、コチラになります」

１５４０００の数字を出した電卓を提示する店員。

キターーーー！　２４カラット！　実はせいぜい１８カラットくらいかな？　と思ってたのに純金！　純金ですぞー！！

……ついつい熱くなってしまったが、さてどうする。売る気は正直なかったが、思いのほか良い金額が出ちゃったぜ。このまま売ってしまっても構わないが……。

……ま、いいか！

売っちゃおう！　そんで無駄使いしよう！

事務的に免許証の提示が求められた以外、なんの詮索もなく買い取りは終わった。今俺の手には１５４０００円がある。ネトオクで１ヶ月がんばっても純利益でこの額が出るのは稀だ。

それが一日でなー……。

もうホントに異世界との交易で生活するしかねぇ……。異世界怖いとかもう言ってらんねぇ……。

その日はその後、ラーメン屋でトッピング全部乗せ大盛り味噌ラ

ーメンを食べて（なんと餃子も付けた）、スーパー銭湯でひとっ風呂浴びて、缶ビールを買って帰って晩酌して寝た。

いやぁ、本当に贅沢って良いものですよね！

え？　セコイ？

２年もニートしてるとこんなんでも大贅沢なんだよ！

第１１話　異世界生活への始動の香り

次の日、朝５時に起きた俺は、昨日のうちに洗って乾かしておいた異世界服を身にまとい、向こうに持っていくものをバッグに詰め込んだ。

まずは、ナイフ。ボウイナイフはシェローさんにあげてしまったので、あとは中型か小型のナイフしか手元にない。昔、冗談で作ったククリナイフもあるが、あれはまだ未完成のまま放置してあるし……。

なので、中型のなんの変哲もないシースナイフを１本だけ持つことにした。

次に金貨を１枚だけこっちに残して、残りの８枚をバッグにＩＮ。

あとは、精霊石にギルドカード、デジカメ、救急キットにチリ紙、ハンカチ、タオル、お泊りセット（歯ブラシとか下着の替え）、非常食に、手持ちの宝石の中から数点。

まあ、こんなもんか。

お泊りセットを用意したのはアレだ。宿泊代がどれくらいかによるけど、向こうの宿に泊まってみるつもりだからだ。

手持ちの宝石は、安いものからイミテーション（模造品）、ちょ

っと高いものまで、全部で２０数点。ジュエリーケースに入れて持っていく。

この宝石は例のブラック企業で働いていたころに手に入れたものだ。ああ、そういえば俺がどんな職種の仕事をしていたかまだ話していなかったな。

ハローワークの楽しげな求人募集に釣られて入ったその会社は、一口で言えば宝飾貿易業とでもいうもので、やってることはけっこう幅広く、宝石や絵画、毛皮やらの輸入輸出。絵画や宝石の営業販売、各種イベントの企画運営なんかが主な業務だった。

俺はそんな中、宝石の販売員として割り当てられたのだが、ノルマは月２００万円、残業代なし、休日出勤手当てなし、朝礼長い、飲み会の強要、怒号に叱咤、さらに社長の顔がクドい、などなどブラック丸出しなその体質にすぐに辟易してしまった。

ボーナスが現物支給でしかも、宝石か毛皮か美術品か好きなのから選んでいいぞ！　などと言われた時は、マジで辞めると誓ったもんだっけ……。やっぱボーナス年４回とかいう会社にホイホイ入っちゃダメってことだったんだな……。

まあ、でもあんな会社にでも入ってたから宝石学者なんて天職があるんだろうとは思うけど……。もう、２度とあんなところでは働きたくないものだ……。俺が辞めてから暫くして脱税で摘発されたって噂だけど、どうなったのかなぁ……。

それはさておき、異世界だ。さっさと出かけちゃおう！

そしてやってきました異世界。

これからエリシェの街に向かうわけだが、距離がけっこうしんどいんだよな。移動手段つーと、馬くらいしか思い浮かばないけど、馬なんて乗ったことないしなぁ。自転車ってわけにもいかないだろうし……。

剣士だの詐欺師だのなんて天職いらないから、騎手の天職でもあれば良かったのに。むしろこれから増えないかしら天職。神官ちゃんにそういうこともあるか聞いてみるかな。

なんてことをウダウダ考えつつも、シェローさんと出くわさないように気を配り歩き、エリシェに到着した。

鏡の屋敷から歩いたり小走りしたりして、およそ1時間半。歩く速度がだいたい時速6kmだとして9kmくらいか？　実際はもう少し短いだろうが、なんにせよ5km以上か。なんらかの移動手段を確保したいものだな。

エリシェの街は、昨日と同じように活気に満ちていた。

俺は一直線に神殿に向かった。目指すは神官ちゃん！　エルフの神官ちゃんですぞ！　（そういえば名前聞いてなかったな）

◇◆◆◆◇

「今日は神官様はお休みだよ」

デジカメ握りしめて勢い勇んで神殿に飛び込んだ俺に無慈悲な言葉を投げ捨てるカボッチャさん（仮名　推定５８歳人間女。髪型がカボチャぽい）。

「では、神官さまをお願いします」

「だから今日は神官様はアレの日だからお休みなんだよ。また明日来るんだね」

ガーンだな。出鼻をくじかれた。

……つか、今アレの日って言った？　あのオバサン、アレの日って言ったよね。アレの日ってつまりアレの日ってことなのかな。エルフでも月に1回あるのかな。いや、まてよ……、エルフはあんまり性的欲求が強くない種族と聞くからな……、その反動で半年とか1年に1回、その……強烈な発情期的なものが来るって昔なんかのノベルで読んだ！　それだ！　このフラグ逃せない！

「……どうしても火急の用事でしてね……。取り次ぐことはできませんかね？」

「そう言われてもねぇ。アレの日のエルフ族がどこに行ってるかなんて、よほど近しい人間じゃないと知らないと思うよ。当然ここにはいないし」

よし！　探そう！　年に1度の発情期で苦しんでいる神官ちゃんを助けられるのは俺しかいない！　フラグ回収するしかない！！

……しかし、考えてみるまでもなく探す手立てはなかった。なんの取っ掛かりもないのに、ほぼ完全に他人のエルフちゃんを探すってのは無理がある。さてどうすっかと思ったが、ふと、例のスキルのどれかが使えるのではないかと思い当たった。

ダメ元でやってみるか！

天職板を出す。

異界の賢者のところにあるスキル「異世界旅行」「世界の理」そして「真実の鏡」。

真実の鏡は使えば即クエストクリアになるから、これはどちらにせよ早めに使おうと思っていたが。

さーて、ところでこのスキルってどうやって使うの？　試しに板を指でクリックしてみたが抵抗なくすり抜けちゃうばかり。

やっぱ天職板出すのと同じようにやるのかな。

まず、異世界旅行を試してみる。試すといってもなんだか全然意味が解らん。「異世界旅行異世界旅行異世界旅行……」と念じるのみよ。

……はい。なにもおこりません。

さ、次々。「世界の理世界の理世界の理……」と念じるのみよ。

……はい。なにもおこりません。

大丈夫かこれ。なんか前提からして間違ってるのかな。説明書が欲しいにゃー。

気をとりなおして、次。「真実の鏡真実の鏡真実の鏡……」とダメ元で念じてみた。

念じてすぐに、天職板の内容が一瞬で切り替わった。ページをめくるように。

切り替わった天職板にはこう刻まれていた。

――――――――――――――――――――――――――――――

【種別】

？

【名称】

？

【解説】

？

【魔術特性】

なし

【精霊加護】

なし

【所有者】

ジロー・アヤセ

――

「なんぞこれ……」

などとボンヤリングしてる暇もなく輝きだす俺。

ああそうだ、真実の鏡使ったからクエストクリアなんだな。

ポンッ

とまた、天職板が可愛い手乗りサイズの妖精になる。

「よおよお！　なんだよその謎の機械はよ。鑑定するのはいいけど

もうちょっとワタシ好みの奴にしてくれよな。あ、コレお祝いの品な。今回は簡単だったからショボイやつだぜ。売ってもいいぞ。じゃあな。また世のため精霊様のためにガンバッテくれよ」

ポンッ

そしてまた手に石が乗っている。相変わらず言うことだけバッと言って帰るやつだなぁ。

順を追って考えると。

まず真実の鏡は、どうやら鑑定スキルのようだ。妖精がそういっていたし、そもそも妖精が鑑定をしてくれているようだし。

今回鑑定したのは、俺が手に持っていたデジカメだろう。あの妖精が鑑定しているみたいだから、異世界のハイテク機器のデジカメは鑑定しきらなかったんだろうな。

しかし、これは妖精の性能によるが、ものすごく有用なスキルだ。異世界の商品を扱うともなれば無二のものだと言ってもいい。これからどんどん使っていこう。グフフ。

精霊石はコブシ大の透明でシャープな両剣結晶体だった。

「水晶（クォーツ）だなこれは。ハズレか。せめて色付きならよかったがなぁ……」

「ちょ、ちょっとあなた！　それお導き？　今達成したの？」

突然興奮して食いついてくるカボッチャさん（仮名）。まあ、確かに外から見ればなんかボンヤリしてるな、と思ったらクエストクリアしてた、みたいな状態だろうからな。

「あ、はいそうですけど、なにか？」

「なにがもらえたんだい？」

「えっと、コレですね」

そう言って、水晶を見せる。

「ほー。いいのに当たったね。これ、真実の鏡だよ」

「真実の鏡ですか？」

「占いで使うからね。そう呼ばれてるんだよ、この石は」

……なるほどね、精霊さんもエスプリが利いてらぁ。

◇◆◆◆◇

水晶はタオルに包んでバッグにしまい、神殿を出た。

結局のところ神官ちゃんを探す方法はなさそうなので、神官探しはスルッと諦めた。

人間諦めが肝心だよな。気持ちの切り替えの速さで仕事に差が出るってばっちゃも言ってた。

さて、神官ちゃんがいないとなると、あと事情を知っててアテになりそうなのは商工会議所のトビー氏か武器屋のオヤジだが……。

トビー氏には俺レベッカさんの甥ってことにしてあるんだよなぁ。嘘だと見破られてそうではあるんだが……。

でも、ま、トビー氏にはそれ以外にも聞きたいこともあるし、商工会議所に行ってみよう。

商工会議所に辿り着いて今更ながら気付いたが、もうギルドカード持ってるんだし、無理にトビー氏に取り次いでもらわなくても一般職員（できれば女性希望）でも全く問題ないんだよな。

よかった、あんな眼光鋭い男とマンツーとか無駄に寿命縮めるわ。

というわけで受付でギルドカードを出して、これから商売を始めるにあたっての相談に乗ってもらいたい云々を伝える。

そういうことでしたら、と受付嬢（セミロングの気の良いオカチメンコといったとこか。推定年齢２６歳）がそのまま相談に乗ってくれるそうだ。商談席のようなところに案内され、そこで話をすることになった。

「……というわけで、この街に来る途中で暴漢に襲われましてね、

ちょっと記憶が飛んでる部分があって、いろいろ曖昧になってるんですよ。なので、基本的なところも聞くかもしれませんがよろしくお願いします」

「まぁ……、大変でしたのね。私にわかることでしたらなんでも答えさせていただきますわ」

この記憶喪失設定を話すのも、もう手馴れたものだ。つか流れるように嘘が出てくるのは、俺の素養ではなくあくまで詐欺師の天職のせいだと思いたいね。本当の俺は素直な良い子です。

「まず、この街か郊外で家を持ちたい場合はどこに問い合わせれば良いのでしょうか？　この街で商売をやるのは良いのですが、やはり拠点がないと、いつまでも宿暮らしというわけにはいきませんのでね」

「家ですか。街でならば、ギルド所有のものもありますし、個人所有のもので店子＜たなこ＞を募集しているものもございます。郊外では土地所有権が曖昧な土地が多いですから、建てた者勝ちなところがあるというのが実情ですわ。それと郊外でも、村に住むのはあまりお奨めできません。村のルールに縛られてしまいますし、はっきりと言いますと商人にとっては足枷になりますから」

「なるほど……。たとえば、村からは離れている、誰も住んでいない屋敷なんかの場合はどうなりますか？」

「それは廃屋ということでしょうか？　場所によりますが、廃屋となって長そうならば、そこに住んでしまっても構わないと思いますよ。修繕にはそれなりかかると思いますが……。すでに目星を付けた屋敷が？」

「ええ、まあ。……えっと、では僕がそこに住むと決めた場合、そこが僕の家だということを保証する書類のようなものをギルドで発行してくれたりなんかはしてもらえないでしょうか。廃屋とはいえ勝手にすむというと不安ですし、なにより高いお金を掛けて修繕してから、ここは俺の家だから帰せということになっても困りますし」

と言うと、さすがにそれだとわからないからと、上司のところに聞きに言ってしまった。ハッキリ言ってあの屋敷が一番の懸案なのだ。あの家をまず自分の家にしてしまわないと、枕を高くして眠れない感じがある。

こう見えても俺ってば、アットホームな異世界生活夢見ちゃってんだよね。俺がいて……、エルフがいて……、暖炉なんか灯しちゃって、シチューなんか食べちゃって……。ベッドはクィーンサイズを買おう……。

だから大事。家大事。

でも書類ってのはあまりに現代的な考え方だったかな？　ファンタジー世界なんだからテキトーでもよかったのかもな。

受付嬢が向かった方向を見ると……、わぁお、上司はトビー氏だわ。そんでトビー氏連れてきちゃったよ。俺だと確認して微妙にしかめっ面だよトビー氏。

挨拶もそこそこに席について、おもむろに地図を広げるトビー氏。

「話はだいたい聞いたよジロー君。で、その屋敷とやらはどこにあるんだい？」

地図はエリシェ近郊の地図らしく、南の海に面したエリシェの街と、北と西に続く街道なんかが描かれている。

「えっと、この地図だとシェローさんの家は……、ここですか？とすると村がここで、街道がこうだとすると……、このへんですね」

「うむ……？　そんなところに廃屋敷などあったかな……？　ミサキちゃん、ちょっとオルセルを呼んで来てくれ。やつはヤーツト村出身だ」

はいと返事をして席を外す受付嬢。どうやらミサキさんと言うらしい。ずいぶん日本的な名前だな。

オルセルさん（推定年齢３２歳のオジサンオニイサン。人良さげ）はすぐに来た。

「オルセル。ここに何年も放置された屋敷があってな、この青年がそこに住みたいそうなんだが、こんな場所に屋敷などあったか？」

トビー氏が聞くと、しげしげと地図を眺めるオルセル氏。

「んん？　ここですか？　……冗談よしてくださいや。そんな場所にゃなンにもありゃしませんよ。ガキのころよくそこらで遊んだもンですがね。廃屋なんかあったら格好のガキの遊び場になってますよ。それに村からも目と鼻の先じゃあないですか。よほど最近建てた屋敷ならば、俺が知らないってこともあるかもしれませんがね」

「……だ、そうだ。ジロー君。そもそもこの辺は森が近いからな。郊外に住む者はシェローのような物好きを除いては、ほとんどいない。」

「だとすると僕が見たあの屋敷は？」

「なにかを見間違えたかしたんじゃないのか？　まあ、もしもそこに本当に屋敷があった場合は……そうだな……、住んでしまっても構わないよ。証明書を発行してもいい。どうせ君にしか見えない屋敷なんだからね」

と言って笑顔になるトビー氏。

これ絶対馬鹿にしてるよね。ミサキさんもオルセル氏も苦い表情してるし。

クソッ、どうしてこうなった。

でもまあ、冷静に考えれば、証明書も発行してもらえるし、あの屋敷の存在もいまいち誰にも知られていないようだ。

結果だけを見れば最高じゃん。気にしたら負けかなと思っている。

「ありがとうございます、トバイアスさん。では、その証明書はいただいておきますよ。今度ぜひ遊びにきてください」

「ああ、そうさせてもらうよ。証明書はすぐにできる。ちょっと待っていてくれるかい？」

お互いにニヤリとし合う俺とトビー氏。茶番だわぁ。

トビー氏とオルセル氏が持ち場に戻っていき、また受付嬢と2人になる。

とりあえず家の件は、これでよしとして、まだ聞かなきゃならないことが沢山あるのだった。

店の持ち方。店のだいたいの値段。お奨めの宿。宿の値段。買取所のこと、この街のこと、それにこの世界のこと……。

でも、それはさておいて。

「護衛を雇いたいと思っているのですが、どこで雇えますかね？」

「護衛ですか？　ハンターギルドなどで冒険者を護衛として雇うこともできますが割高ですわよ？」

「やはりそうですよねぇ。普通、商人の方はどうしてるんでしょうか。冒険者を雇うのが一般的なんですか？」

「普通は奴隷が多いんじゃあないでしょうか。商隊を組むような場合は護衛を雇う場合も多いですけれど」

「奴隷……ですか。しかしイザというときに奴隷が命を掛けて働きますかね？」

「奴隷の契約は、正式な精霊契約ですから大丈夫ですわよ」

「精霊契約？」

「精霊との間に交わした契約ですわ。これを反故すれば、即ち精霊の祝福を失うことを意味しますから。まして、護衛奴隷は他国で戦士をしていた者が多いのですよ。彼らは敵に背を向けて逃げ出したりはしませんわ」

なるほど。案外良いもののようだぞ奴隷。

買ってみてもいいかもしれないぞ奴隷。

そう思ったらだんだんその気になってきたぞ奴隷。
でも一生面倒見るとか無理くさくね奴隷。
だいたい値段どれくらいするんだ奴隷。
出来れば女の子がいいな奴隷。
もっと言うと若い子じゃなきゃな奴隷。
正直に言うとエルフだったら最高だ奴隷。

「奴隷っていくらくらいするんスか？」

あ、喋りが雑になってしまった。スか？　じゃないよ、スか？
じゃ。

「私はあまり詳しくありませんが、ピンキリだと聞いております。
安くとも金貨１０枚程度はするはずですが……」

「なるほど……」

安っす。
どんな人だったとしても金貨１０枚て、多く見積もって１５０万
円じゃん。
人生安っす。

さてはて、詳しく知るためには実際に奴隷を売ってるところに行
ってリサーチするしかなかろう。

奴隷商とか俺の人生はじまって最大の冒険になるで……。

第１１話　異世界生活への始動の香り（後書き）

全国１０００万の奴隷ファンの方おまたせしました。ようやく次回奴隷のターンのようです。

第12話　エルフ奴隷は金額的に無理な香り

俺があの屋敷（鏡の屋敷ね）の正式な住人であるという証明書は、かなりガチな感じにトビー氏が作成してくれ、ニヤニヤしながら渡してきた。

羊皮紙に異世界言語でなんらか書いてある書類である。当然読めないのだが、まああの男のことだ仕様に問題があったりはしないだろう。

ちゃんと慇懃な感じに「お手数かけましてありがとうございます」と言っておいた。「いえいえこれもギルドの仕事ですから」と笑顔でトビー氏も応対していたし、何の問題もないぜ。

……いずれガチで屋敷に招待してやろう。どんな顔するのか見物だな。

その後、その他の聞きたかったことを一通りミサキさんに聞いてから、俺は商工会議所を後にした。次の目的地は、奴隷商館である。

もちろん奴隷を買えるほどの金はないんだが、奴隷商行って、どんなもんだかリサーチしなければならんのだ。……が、実際には腰が引けるなぁ。どういう風に売ってるものかもわからないし、現代日本人にとって奴隷とか……、なんつーか真っ直ぐ向き合える気がしないっつーか……。

でもこっちで活動するなら、護衛、できれば、こっちの世界のこ

とを教えてくれるアドバイザーにもなってくれる人が必要なんだよな。文字も読めないし……。

奴隷商館の場所はミサキさんから聞いていたので迷わず辿り着いたんだが……が……。これは入りにくいわぁ……。

商館は白壁の窓のない2階建てのきれいな建物で、入り口は閉ざされ、看板らしきものはあるものの中の様子は伺えないという、ひっじょーに入りにくいものだった。

非常に入りにくいっていうか……、これに1人で入るの？　1人で廻る寿司屋にすら入れない俺が？　「1人焼肉」以上に高難易度なんですけど。

それに、どう見ても会員制っつーか、一見さんお断りって感じのオーラが剥き出されちゃってるし……。上級者向けすぎる……。

でもなぁ……。

異世界で商売するなら、乗り越えなければならないハードルなんだよねこれ。貿易とは戦争なのだよ！

でもしかし、素直に扉を開けて入っていく勇気はどうしても出なかったので、誰かが出てきたらお見送りに店のもんが出てくるだろうから、それを捕まえる作戦を採ることにした。さすが俺小賢しい。

店の前を不審者よろしくうろつく俺。

入ろう！　と決めた勇気が時間をおくごとに萎えていくのを感じながら、しかしそのときが来たら飛び出して、ああ言ってこう言って……とシミュレーションしていた。

１５分もうろついたころだろうか、はたしてついに店の扉が開いた。

◇◆◆◆◇

扉から出てきたのは、２０代中程くらいかの銀髪が印象的な貴族風の男だった。店員の見送りもなく普通に店から出て歩いてくる。丁度俺がいる方向に。

店員の見送りがないとはアテが外れてしまったな。次を待つという手もあるけれど、奴隷商館なんて、そんなに客が多いわけでもないだろうしな。それともこのお兄ちゃんに話かけてみるかな。

それに、ひょっとするとこの人が店員の可能性もあるしな。

俺は思い切って話しかけてみることにした。いずれにせよ、奴隷のことが少しでも聞ければいいのだし、あの店に入るよりはハードルが低かろう。

「あの……、ちょっとお時間よろしいでしょうか？」

「はい？　どうかなさいましたか？」

にこやかに返事をしてくれる貴族風の男。お供もなしで単独で歩

いているし、貴族風の一般人なのかな。でも顔付きというか、オーラというか、正直あんまり一般人ぽくないけどもな。

「いえ、今そちらの商館から出てくるのが見えたものですから、ちょっと教えていただけたらな、と思いまして……。あ、僕はジロー・アヤセという者で、商人をやっております」

「商館に御用で？　今は営業中のはずですから行ってみては？」

「いや、実は、恥ずかしい話なのですが、僕は奴隷を買ったことがなくてですね、あの門構えに怯んでしまいまして……。ですから、よかったら少しで良いので奴隷について教えていただけたらな……と」

「そういうことでしたか」

一応納得したらしい貴族風の男。どうやら店員ではなかったようだ。勢いに近い形でこの人に声を掛けちゃったが、やっぱ素直に店に行っとけばよかったかなぁ。でもまあ今更だな。

「それでどういったことが聞きたいので？」

「護衛のための者が欲しいのですが、相場としてはどれくらいなのかなと。種族や性別でどの程度変わるのかなんかも教えていただけたら……」

「相場という話ですが、まず、奴隷に相場というものはありません。種族、年齢、性別、容姿に経歴、天職によって大きく変わりますから。あなたがどのラインの人員を求めているかによりますが、奴隷

として最低の部類『人間の６０歳の男性、醜男の元山賊の下っ端で天職なし』という条件ならば金貨１枚でも買えますよ」

淀みねぇなこの人。詳しいし。スラスラ教えてくれるし。この人に聞いたのは正解だったようだな。もっといろいろ聞いておこう、そうしよう。

――そして調子に乗ってしまった。

「希望を言うなら、エルフの若い女性で剣と魔法が使える子が欲しいんです」

「……正気か貴様」

あっれー？

◇◆◆◆◇

「なにかおかしかったでしょうか。……すみません。実は僕、記憶を一部失っていましてね。なにか気に障ったのであれば謝ります」

「ああ、そういうわけでしたか……。いえ、エルフの奴隷が欲しいとはなかなか度胸がおありになるな、と思いましてね」

貴族風の男氏によると、エルフの女性というのは奴隷の中でも最上位に君臨するものらしく、買えるのは王侯貴族か大商人くらいのものらしい。当然値段は天文学的な数字。

しかも予約制。

そうでなくとも、奴隷になるエルフ自体が少ない。

普通は、莫大な「借金」をしたか「犯罪」を犯したか「敗戦国」から連れてこられたのどれかで奴隷に身をやつすらしいのだが、借金で奴隷になったり、犯罪で奴隷になったりするエルフはほぼいない為、自ずと敗戦国奴隷のみとなるそうだ。

しかし今は戦争は膠着状態。当然新規の敗戦国奴隷は入ってこない。だからエルフの奴隷は余計に少ないという寸法。

次に、エルフは他の種族と比べても寿命が長い。

いや、大事なところは見た目の若い期間が長いところなのだ。性的な意味で。貴族なんて自分の息子に引き継いだりするらしいんだよ。性的な意味で。もうやだこの国。

次に、エルフは精霊魔法が使える。

精霊と共にあるこの国では、精霊魔法を使えるものが近くにいるってのは、特別な意味があることなのだそうだ。精霊魔法は精霊と感応して起こす奇跡なんだってさ。これは魔術師の使う魔術とは全く別の概念なんだそうで……。

最後に、エルフを奴隷にするってが、すごいステータスなんだとか。

民草にはちょっと嫌われるらしいけどね。エルフ尊敬されてるから。でも値段とか凄いし、商人でエルフの奴隷持ってるっていうと

一流の証明になるんだと。

――――というわけで、俺みたいな若いペーペーが気楽に「エルフの奴隷」とか言っていいもんじゃなかったらしい。

……だが……

「そうだったんですか……。でも買えることは買えるんですね。そこの商館でも予約ってできるんでしょうか」

「今の話を聞いていて、それでも買う気なんですか？　正気を疑いますよ……。それとも、大商人の息子かなにかなんですか？」

「いえ、純粋たる一個人ですけども。でも夢が金で買えるなら、目指してみたいですね。……それに、僕はいずれにせよ大商人になりますから。エルフを買うのが先になるか後になるかの違いだけですよ。ま、今はしがない駆け出しですが」

「……夢、ですか」

難しい顔をして沈黙する貴族風の男。

そうさ、夢さ。叶うはずのなかった夢さ。地球に3億人くらいいるはずのエルフファン全員の夢さ。

それにエルフちゃんも俺のところに来たほうが幸せに決まっているね。なぜならおそらく俺が世界で一番エルフを愛しているからだ！　たとえそれが俺の独りよがりであったとしてもだ！

沈黙していた貴族風の男が俺に向き直って言った。

「では１つ勝負をしましょうか」

「勝負ですか？」

「勝負です。あなたが勝ったらエルフをお譲りしましょう」

「ハァ……、て、え？　マジで？」

いきなりよくわからない話の流れに。

つい素でマジで？　とか言ってしまう俺です。

第１２話　エルフ奴隷は金額的に無理な香り（後書き）

貴族風の男の見かけの年齢を２０代中盤に変更しました。

第１３話　異世界勝負は無謀な香り

「自己紹介がまだでしたね。私は御用商ソロ家のエフタ・ソロと申します。第１自由都市マリシェーラの者ですが、今日はエリシェに奴隷の納品をしに来ましてね。丁度これから奴隷をこちらに運ぶところだったんですよ」

御用商……ってことは、国のお抱えの商人さまってこと？　やっべ、超大物なんじゃね。

奴隷商館の店員かも！？　なんて思った自分をぶん殴ってやりたい……ってほどでもないか！　エルフ扱ってるなら結果オーライだ！

「はい。それでは、今日こちらにエルフのフリーの奴隷を連れて来てるってことなんですか？」

「いえ……、先ほども申しましたが、エルフの奴隷は予約制でしてね。私のところだけでも８名待ちという状況ですから……。今の国の情勢で正規に予約待ちをするなら、最低でも５年は待つことになるでしょうね」

８名待ちが多いのか少ないのか判断付きかねるけども。値段すごい高いみたいだし、ボチボチ多いってことなんだろうな。厳密には

いくらくらいするんだろうな。
しかし、5年待ちとか凄いな。どんだけ人気なんだよエルフ。俺が世界一エルフ愛してるとか、撤回しなきゃならないかもしれないほどのエルフ人気だよコレ。

「そんな状況であるのに、勝負？　に勝てば僕にエルフを譲ってくださるんですか？　勝負の内容にもよりますけど、あ、でもお金はすぐには用意できませんよ」

「いえ、あなたが買った場合お金は結構です。そのかわり、あなたが負けた時はそれ相応のペナルティを負っていただくということで。――どうです？」

どうです？　ったって内容がわからなきゃどうしようもないんですけお……。
だいたいこういう「うまい話」ってのは、必ず酷い結末になるものだよね。教訓だらけの世界で育った日本人を甘くみなさんなよ！
ブラック企業じゃむしろ「うまい話」で騙す側だったんだよ！

でもいちおう話は聞いちゃう！　どういう勝負かわからないけれど、どっかに抜け道があるだろうからな。ひょっとするとブッコ抜けるかもしれんし。

「ではまず勝負の内容を教えてください。あまりにも勝機のないものなら、さすがに夢が掛かっていても乗るわけにはいきませんから」

「勝負内容は、簡単に言えば贈り物対決です。相手はエリシェの市長。贈り物を相手に気に入られたらあなたの勝ち。それ以外なら私の勝ち。簡単でしょう？」

簡単でしょう？　じゃないよ。賄賂（ワイロ）じゃねーか。
しかも贈るの俺だけってことは、贈賄でアレされたら俺だけナニされるってことじゃねーのコレ。さりげなく酷い提案だな。
「なるほど……。それは僕、ジロー・アヤセ個人として市長に贈り物をすればよいのでしょうか？」
「そうなりますね。私が市長に渡りを付けますからご安心ください」
「……つまり、エフタさんに紹介された僕が市長に贈り物をして、市長がそれを気に入れば僕の勝ちだと。そういう勝負ということでしょうか」
「そうなりますね」

ソロ家とエリシェとの関係がイマイチよくわからないが、贈り物作戦がうまく行くならエルフくれてやっても良いくらいの旨みがあるということなんだろうな。
一応俺の名義で贈り物をするけど、うまくいったら旨みはエフタ氏が総取りする……と。
そういう話だなコレは。汚いさすが御用商汚い。

しかし、下手こいて変なもの渡せばアレされる可能性のほうが高い……と。もしくは市長が高潔な人物で賄賂が効かないとかか。
そうでなければ、見ず知らずの俺みたいなのに、こんな話を持ちかけたりはしないだろうしな。
エルフが欲しいなんていう世間知らずをダメ元で使ってみようという話なのか……。

そもそも、この国における贈賄の罪の重さってどんなもんなんだろうか。一発死刑とかだとしたら、いくらなんでもギャンブル過ぎるなぁ。

つまり、この勝負に勝つためには、まず市長について調べあげて、市長になんらかの商売上の便宜を図ってもらえるくらいの贈り物（ワイロ）をする必要があるってわけだ。

そして失敗したら、あくまで俺が勝手にやったこととして、エフタ氏は俺を見捨てる。トカゲの尻尾切りっていうのかな、この場合も。

うーむ……。どうなんだコレ。

「……僕が負けた場合のペナルティを教えてください」

「あなたが負けた場合は……、そうですね。精霊石を１０個いただきましょうか。手持ちがなければ、これからあなたがお導きを達成するものを予約するという形でもかまいませんよ」

……精霊石１０個ねぇ。まだ精霊石の価値を調べてないけれど、昨日今日でもう２つもあるし、精霊石１０個とエルフとじゃ釣り合い取れてなさ過ぎる。

てことは、これは形だけのペナルティってことなんかな。失敗したら贈賄でアレでナニしちゃうんだろうから……。

それともそもそもがダメ元のお試しなんだろうから、エフタ氏的には精霊石の１０個も取れれば元出なしで小遣い稼ぎくらいにはなるって考えなんだろうか。。精霊石なら取りっぱぐれのない債権としちゃ、優秀なんだろうしな。

それともなんらかの当て馬的なものとして利用とか……。

……考え出せばキリがないか。

「どうです？　勝負しますか？」

「その前に確認をさせてください。まず、エルフは予約制で手元にいないんじゃないんでしたっけ？」

「いえ、ついこの間ひょんなことから手に入ったエルフがおりましてね。予約の方々とは少々条件が折り合わないので、まだ手元にあるのですよ。まだ若い美しいエルフの少女ですし。その点はご心配なく」

ふむぅ。いることはいるらしい。

どうするかもっと詳しく聞くか。でも嘘並べられる可能性もあるし、現物を見ないことにはどちらにせよ信用しきれないし……。

でも「若い美しいエルフの少女」って聞くだけで、命を賭したギャンブルでもやってみたくなるから男ってのは愚かだわぁ。相手の思う壺だよ！

◇◆◆◆◇

そして俺は命を賭けた勝負をすることにした。

いろんな材料を天秤に掛けて、おそらく上手くやれると判断したからだ。

でももし上手くやれなかったら、なんとか屋敷まで逃げて、ほとぼり冷めるまで異世界は禁止か、泣く泣く鏡自体を売るしかなくなるかもしれないが……。

それでもエルフ少女がかかってる以上、やるしかねぇんだぜ。悪い奴隷商に捕まったエルフ少女を助け出す俺とかってこの上ない胸熱シチュだよね。これは惚れざるを得ない。

贈り物はエリシェ設立５０周年のパーティで……とのこと。ハッキリ言ってハードル高いんだけど、ブラック企業のころパーティでの売り込みとかわりとやらされてた俺に死角はなかった。職歴って偉大だなぁ。

エリシェ設立５０周年パーティは、「エリシェ設立５０周年祭」の２日目の夕方から開催されるそうだ。俺はそのときにエフタ氏に紹介されて市長に贈り物をする。そういう段取りである。

実行日の５０周年祭まで、あと１５日ほどあるのでその間に準備をしなければならない。ハッキリ言ってあんまり時間ないんだけれど、俺がんばるよエルフちゃん！

勝負の内容が口約束だけなのが気になったんだが、当日にエフタ氏のお抱えのエルフによって正式に精霊契約を結ぶんだとか。「逃げてもいいんですよ？」などと挑戦的なエフタ氏だったが、準備しきらなかったら考えさせてもらお。

最後にさりげなく「どうして市長に贈り物をするの？」　と聞いてみたら「５０周年のお祝いですよ」　とシレッと答えたエフタ氏。じゃあなんでお前は贈らないんだよ。バカなの？　死ぬの？

◇◆◆◆◇

１５日後に中央広場の前で待ち合わせる約束をしてエフタ氏と別れた。

さて、これからこの勝負に勝利するために打てる手をすべて打たねばならない。まずは市長についての情報収集。贈賄の罪の有無。５０周年祭について。

細かいことを言えば、もっといろいろ調べることはあるが、到底１人では無理なので誰かに協力して貰う必要があるな……。

いろいろ考えたが、結局、シェローさんとレベッカさんに頭を下げて手伝ってもらうことにした。あのとき、逃げ出してしまったことも謝っちゃって、協力してもらおう。

これから鏡の屋敷に住むなら、ご近所さんになるのだしな。

第１３話　異世界勝負は無謀な香り（後書き）

サクサクいきたいのに止むに止まれずダルい展開になってしまいました。
このへんは早めに終わらせて早くエルフとお風呂入ったりしたい！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3102y/

ネトオク男の楽しい異世界貿易紀行

2011年11月27日19時02分発行